

令和4年度 地域の支え合い仕組みづくり事業

中間報告会実施報告

神奈川県 福祉子どもみらい局 共生推進本部室



本資料の構成

- 1 中間報告会概要
- 2 (平塚地域) プレゼン発表
- 3 (同上) 質疑応答
- 4 (三浦地域) プレゼン発表
- 5 (同上) 質疑応答
- 6 (藤沢地域) プレゼン発表
- 7 (同上) 質疑応答

末項 別表 個別事業一覧

1 中間報告会概要

1 中間報告会概要

県では「ともに生きる社会かながわ」を実現していくため、それぞれの地域が住民、NPO、市町村など各主体の力を生かし、自ら地域課題の解決を支援する「地域の支え合い仕組みづくり」事業を令和2年10月から県内3地域で行っています。

事業開始から1年経過するのを機に、次のとおり各地域の報告を行っていただきました。



- (1)日時 ・ 令和4年11月8日 (火) 13:30~15:00
- (2)実施方法 ・ Zoomによるオンライン
- (3)発表者 ・ 各地域代表者
- (4)発表方法 ・ プレゼン資料を基に約10分で発表
・ プレゼン後、プレゼン内容について質疑
応答実施

2 (平塚地域) プレゼン発表

【平塚地域 (城島地区) の課題 (概要)】

【課題解決方法】

【プレゼン資料】 / 【説明者の発言】

2 (平塚地域) プレゼン発表

※詳細は末項「(別表) 個別事業一覧」参照願います。

【平塚地域 (城島地区) の課題 (概要)】

- 高齢化、少子化
- 耕作放棄地の増加

⇒何年後かには地域を維持できないのではないかと不安感があり、高齢者がいきいきと参画できる仕組みづくりが必要

【課題解決方法】

⇒地域の強みを活かして
関係人口・交流人口を増やし、地域づくりを行う。



令和4年度 地域の支え合い仕組みづくり事業
中間報告会（令和4年11月8日）

高齢者活躍の仕組みづくり支援分野

地域資源活用による交流 型体験の里づくり事業

城島活力創造推進協議会

第1 概要

(1) 事業全体目的

・地域活動団体、地元の大学・高校や民間企業と連携し、**地域資源を活用した交流・体験活動と高齢者がいきいき参画できる仕組みづくりを通し、地域運営の持続性を向上**していく

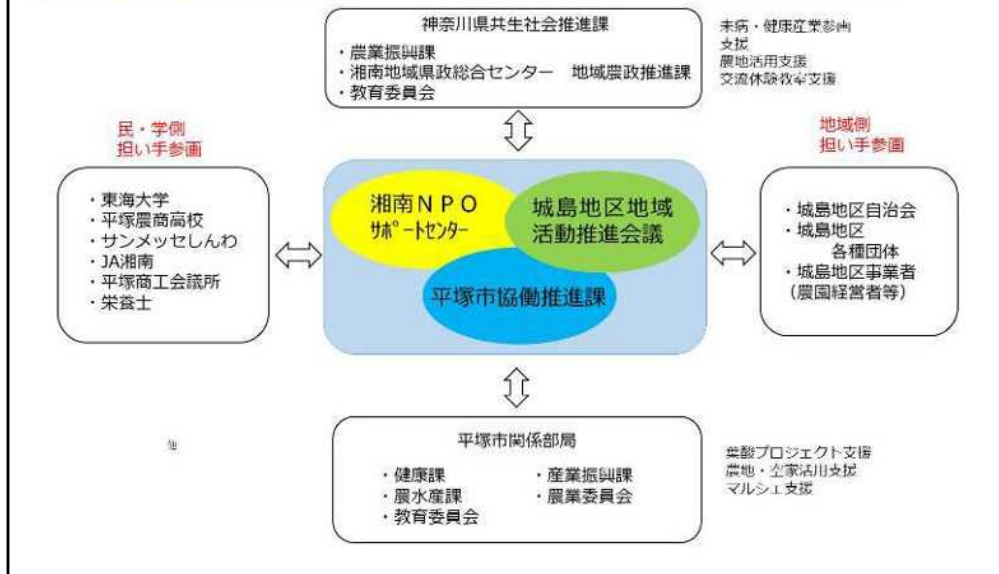
(2) 事業全体内容



- 私どもは、城島活力創造推進会議として、平塚市、城島地区地域活動推進会議、湘南NPOサポートセンターの3者で取り組んでいます。
- 今回の事業の目的ですが、地域資源を活用した交流体験の活動と、高齢者が生き生き参画できる仕組みづくり、その仕組みづくりの先には、地域の運営の持続性、自走化を目指しています。
- 1年目は、いろいろなアイデアを出して、2年目に試行プロジェクトを実施、今年度については、プロジェクトの定着と学び交流の場を展開していこうと取り組んでいます。

第1 概要

(3) 協業/協働体制



- 関係の各機関としては、平塚の地域側では東海大学、平塚農商高校、JA湘南などと連携しています。市では健康課、産業振興課、農水産課、教育委員会と連携しながら進め、言ってみれば農のある暮らしというものを「城島スタイル」というような名前ですら定着できればとスタートしました。

第1 概要

(4) 事業全体内容

ウィズコロナ・アフターコロナを見据えた
身近に農・学びがある暮らし・地域づくり



高齢者はじめ多世代が交流する
持続性ある地域運営
「城島スタイル」の発信



第2 進捗状況

(1) 令和2年度計画と実績/成果

■ 計画と実績

- 事業内容共有化のための広報（10月～）
 - ・活動報告（公民館だより）4回
- 課題・目標確認のための「生活・暮らしアンケート」（12月実施）
 - ・地域住民 940世帯 回収率62% ・事業所 18社
- 地域再発見のための「地域散策/アンケート」（11・12月）
 - ・城所/小鍋島地区（11/29） ・大島/下島地区（12/6）
- アイデア企画のための「WS（ワークショップ）」（12月～）
- 市・学校・民間連携構築に向けた「関係機関協議」（11月～）

● 成果

- **地域づくりの目標の共有**
 - ・「高齢者が元気で暮せる」、子どもの声が聞こえる」
- **資源・環境活用の取り組みの重要性の確認**
 - ・「富士山や大山を望む景観、自然環境」、「休耕田・空き施設等を活用した農業体験、地産物の販売」、「子どもたちの学び・遊びの展開」
- **試行プロジェクト・アイデアリストの作成**
 - ・市推進の「葉酸プロジェクト」との連携

- 令和2年度は、まずこの事業の内容を地域の方々に分かっていただく、それから地域のこれからの姿をどう方向性を見据えたいか、こうしたことを生活・暮らしアンケートとして、地域の全世帯、940世帯にアンケートを行いまして、6割ぐらい回収し、また、地域再発見のために地域散策といったことも行いながら取り組んできました。
- そういう中で、地域の資源としては、富士山や山を望む景観、一方で休耕田など空き施設をうまく使うこと、また、子供たちは少なくはなっていますが、子供たちの遊びや学びの場をうまく展開できないかを考えることとしました。
- 市としては、葉酸プロジェクト、野菜に含まれている葉酸をうまく活用する取組を行おうと、まずアイデアを整理させていただきました。

第2 進捗状況

(2) 令和3年度計画と実績/成果

① 令和3年度計画（スケジュール）



- 昨年度は、その中でいくつかプロジェクトを試行するという事で、まずは4月にキックオフの「きじマルシェ」を開催しました。
以降、米、野菜づくり体験、葉酸たっぷりの料理教室、マルシェも定期でやろう、地域めぐりを皆で再発見しよう、そして情報発信、こうしたことを企画しました。

第2 進捗状況

②令和3年度の実績/成果

<■実績>

■きじマルシェ

4/24 (土) 田植え前のれんげたんぼ

- ・特産野菜販売
- ・事業紹介パ^レル/米づくりマ^シ展示
- ・ふれあいコーナ

*参加者 約200名 スタッフ 約60名

■米・野菜づくり体験教室

5/15 (土) ~11/20 (土) 6回

- ・田植え/稲刈り
- ・野菜植付/収穫
- ・収穫祭での意見交換

*参加者 21家族 スタッフ延約120名

*参加費 1万円/家族

*三密対策として時間帯/チーム区分しながら実施

<■成果>

●高齢者の参画・協力、活躍機会の拡大

→農産物販売、田植え・稲刈り指導、新米試食料理等、高齢者自らが企画運営に関わることで高齢者の活躍の機会の創出と実感

●地域外交流による城島らしさの再確認

→景観、特産物を活かしながら“学び”と“遊び”を体験できる“わがまち”の魅力再確認と取り組み意欲の向上



- 令和3年度の主要なものとしては、キジマルシェ、こちらは田植え前のれんげの田んぼで、いろいろな事業の紹介、野菜の販売、農機具の展示など、日頃触れることが少ないものを、こういう事業をスタートしたということで開催しました。
- 併せて試行的に米・野菜作り体験教室を、地元のライスセンター、生産組合と協働のもとで6回ほど開催し、21家族の方に3密の中で参加していただくことで、れんげの田んぼで、大学生にモニュメントを作っていたいたり、田植えなど行う中で、地域の外との交流で、城島という地域らしさを地元の人が再発見する機会にもなったかと思えます。

第2 進捗状況

<■実績>

■自然・歴史探索体験

－感染防止策を踏まえ
地元スタッフ中心の試行・準備－

・自然農法（みそづくり）

7/18（日）参加者 18名

10/17（日）参加者 10名

11/23（火）参加者 10名

・弁天池再生（生き物観察に向けて）

8/8（日）参加者 15名

・ダイヤモンド富士/星空観察

9/23（木）参加者 10名

12/25（日）参加者 16名

・城島新川秋景色散策

10/10（日）参加者 23名

*健康薬膳料理教室

1/17（月）参加予定16名

→感染防止対策のため中止

<●成果>

●試行PJを通じた多様な外部協力の兆候

→地元スタッフ（高齢者が主体）、地元参加者中心の試行であったが、関係者の人脈やHPや地域メディアでの活動PRを通じ、地域外の協力者（専門家、元教師、栄養士等）や若い移住者の参画の兆し



- 自然、歴史探検として、自然農法、弁天池という使われなくなった湧水のある池の再生、景観の良い富士山のダイヤモンド富士を見るといったことを行い、かなり人づてにいろいろな外部の協力者が増えていきつつあるという状況がありました。

第2 進捗状況

<■実績>

■情報発信

- ・HP「城島へようこそ！」開設
- ・Instagram「KIJIMARCHE」開設
- ・地元メディア放映/掲載
→きじまるシエ、弁天池再生準備等
- ・事業活動報告（公民館だより）
→月1回 R4.10現在20回
- ・「広報ひらつか」での収穫祭の紹介

■外部機関連携

- ・東海大卒論テーマ・フィールドとの連携
- ・平塚農高「生徒商業研究」との連携
- ・地元関連組織、移住者/組織との連携
→湘南ライセナー、介護支援団体
→草木循環Labo（各種体験企画）

<●成果>

●大学・高校との研究・演習の連携

- 若者からの視点、今後の交流体験企画のポイントについて新しい知見を地元スタッフと共有
- 学生や生徒たちにとっては、農ある暮らしト地域の持続性や魅力発信の担い手、仕組みづくりの重要性を考えるきっかけと継続的な連携への理解の向上



○ 情報発信として、ホームページ、Instagramの開設や、地元のメディアで取り上げていただいたり、平塚広報の中で新しい取組として紹介いただいたり、地域の中には毎月1回の活動報告を行いました。

○ また、大学との連携では、卒論のフィールドにもしていただきながら、若い人たちからの視点で、どういう体験交流の企画があるか、大学生や高校生たちから見た農ある暮らしの持続性、SDGsにつながる重要性を感じていただきました。

第2 進捗状況

(3) 令和4年度計画と実績/成果

① 令和4年度計画 (スケジュール)



第2 進捗状況

②令和4年度の実績／成果

<■実績>

■第2回きじマルシェ

4/23 (土) 田植え前のれんげたんぼ

- ・特産野菜販売/野菜パンの販売
- ・事業紹介パル/米づくりマシ展示
- ・健康チェック/健康・葉お知らせ
- ・ふれあいコーナー/花モニュメント

*参加者 約350名 スタッフ 約70名

■第2回 米・野菜づくり体験教室

4/16 (土)～10/15 (土) 7回

→うち雨のため2回中止

- ・田植え/稲刈り
- ・野菜植付/収穫

*参加者 22家族 スタッフ延約100名

*参加費 1万円/家族

<●成果>

●「健康」に関連する企業・協力者との連携機会の拡大、PR

- 地域包括ケアセンターの健康チェックや地場野菜を使ったパン販売等、マルシェを通じた健康テーマの関係機関とのつながりが拡大
- 高校生の斬新なインスタ映えるPR



- 今年度については、2回目のマルシェをまた田んぼの中で開催しまして、前年度に企画したものを回数など深度化していこうと取り組み、プラスアルファとして、夏休みのキャンプとしてできないか、キッチンカーなどの形での付加価値化、商品化ということも想定してはと思いましたが、残念ながらこの二つについては、コロナの長期化で取り組むことが現実的には難しい状況になっています。
- きじマルシェについては、今年度は昨年以上に参加者も多く、地域包括ケアセンターの方に協力いただいて健康チェックをしたり、触れ合いコーナーで、高校生たちに地場の花を生かしながら花モニュメントに取り組んでいただいていますし、野菜を使ったパンの販売など、健康に関連する民間企業とも連携が取れるような場になってきたかと思っています。

第2 進捗状況

<■実績>

■自然・歴史探身体験

- ・自然農法（みそづくり）
7/23（土） 参加者 18名
10/14（金） 参加者 10名
- ・弁天池再生（生き物観察）
7/9（日） 参加者 15名
- ・ダイアモンド富士/星空観察
9/19（月祝） 参加予定 10名
→台風のため中止
- ・鎌倉殿の足跡巡り散策
5/21（土） 参加者 30名
- ・健康薬膳料理教室
6/24（金） 参加者 16名
- ・里まなびデイキャンプ
8/27（土） 参加者 26名
→竹細工と竹飯盒

<●成果>

●親子で参加する体験学習プログラムとしての実施運営体制固め

→昨年度の試行を通じた地域外の協力者（専門家、元教師、栄養士等）に加え、体験学習を推進する「おおすみネット（地域教育カネ트워크協議会）」との協力・共催の立ち上がり



- 自然、歴史体験については、昨年できなかったところをプラスアルファ、薬膳料理とかデイキャンプも行いまして、デイキャンプでは、竹を使ったお皿や飯盒を作ったり、里山の体験などを、地域の教育カネ트워크という体験学習を行うコミュニティスクールに近い組織との連携の中で進めていったということがあります。

第2 進捗状況

(4)これまでの取組みを通じた課題と地域の変化

①課題

▲地域内での活動理解・浸透のさらなる拡大

→公民館だよりに加え、HPやインスタグラム等での活動周知・情報共有に取り組みつつも、コロナ禍長期化により、活動への参加、企画運営への理解の立ち遅れ

▲自主運営を見据えた体制・資金面の整備

→これからの新しいスタイルでの持続的運営、地域経営的企画検討を推進していこうとする次世代の意欲のある人材の参画や資金確保する仕組みがまだ不十分

②地域の変化

●既存地域活動団体との連携の兆し

→体験PJ試行において「公民館事業」との共催や「おおすみネット（地域教育力ネットワーク協議会）」の協力等、小・中学生の参加や親世代が参画しやすい形で実施することで、交流機会を増やす実効性があがると気づき、さらなる連携に取り組んでいこうとする機運の高まり

●地域交流の場としての休耕地、遊休地、空き家等の活用の意義の共有化

→野菜づくり体験での休耕地利用、デイキャンプでの遊休広場利用、移転者の空家リノベーション(まなびサロン化)等、学びの場や交流の場として工夫しながら利用することで地域が動きだすこと、多様な活用の可能性があると土地所有者が気づき、意識も変化

- こうした中での課題と変化ですが、いろいろな活動をしてはいますが、地域への浸透というのは、まだまだもう少しの状況です。
- 体制と資金面については、課題といたしますか、コロナの状況の中で、まだ足固めとしては十分ではないです。
- 一方で、公民館事業や教育力ネットワークの事業ということで、小学生、中学生から親世代、そういった若い世代が参画できる、これが比較的実効性があるのではないかと考えています。
高齢者ももちろんですが、孫世代が参加することで、高齢者も生き生きすることにつながるというのがかなり見えてきました。
- それから、交流の場として、休耕地、遊休地、空き家などを活用することについても、土地や家屋を持っている方々の意識も、変化してきているのではと感じています。

第3 今後の取組み

(1) 令和4年度11月以降の取組み

①スケジュール

- 11月** 収穫祭 : 米・野菜づくり体験者との交流会 (11/19)
「みんなでまなぼうさい」 : おおすみネットとの共催の親子防災学習 (11/26)
「平塚農商高校学校運営協議会」 : 今後の協働活動の協議 (11/10)
- 12月** 冬の星座観察教室 (12/17)
- 1月** 冬の葉膳料理教室
平塚市関係部局との次年度以降の連携・支援の協議
- 2月** 次年度以降自走化運営体制・活動案の協議
城島公民館祭り : 東海大学、平塚農商高校との連携・協働活動紹介 (2/25,26)
第3回きじまるシェ企画開始
- 3月** 令和5年度体験事業計画の作成

*** 「平塚農商高校学校運営協議会」での地域学校協働活動**

今年度は外部交流（学内・学外含め）に関する制約下・自粛の状況にあり、次年度緩和を見据えた具体的連携内容の協議を中心とする。

14

- 取組の課題も含めて書いていますが、今後については、実は平塚農商高校と地域協働活動を今年度から立ち上げました。
ただ、コロナの状況で、まだまだ具体的なところがないので、11月10日に具体的な今後の内容を協議します。
- もう一つ重要なのは、平塚市の関係部局と今後についての具体的な連携や支援について協議に至ってないこともありまして、年明けに取り組んでいければと考えています。

第3 今後の取組み

②平塚農商高校との「地域学校協働活動」取組みの方向（案）

- 「きじマルシェ」と「(仮称)農商マルシェ」のコラボ試行
 - 11/19（土）収穫祭、2/25（土）26（日）公民館祭り時での農商高活動紹介
 - 課題：外部交流緩和後に向け、次年度スケジュールの協議
- 休耕地の体験農地、演習フィールドとしての活用・管理の実験協力
 - 学校デュアル授業化の受け皿としてのハウス野菜・花卉栽培等の体験の可能性
 - 課題：次年度試行に向けた学校との協議
- 葉酸豊富な地元野菜等を使った特産品の試作、レシピの開発協力
 - 規格外野菜を活かした商品試作、健康薬膳料理教室、マルシェでの実演紹介の可能性
 - 課題：許認可上の制約
- 新たな地域魅力発見と体験プログラムのコンテンツ企画・作成・PRの協力
 - 地域歩きをもとに「きじマルシェ」「デイキャンプ」等、企画側への参画
 - 課題：ワークショップの実施時期
- 「きじマルシェ」や各種体験プログラムの参加者意見分析の協力
 - 上記①～④の中で検討

- 平塚農商との取組ということで、マルシェのコラボ、体験農地や演習フィールド、デュアル事業化への対応、新しいレシピの開発、体験プログラムのコンテンツの企画など、若い人の視点で実験的に展開ができればと考えています。

第3 今後の取組み

③ 自走化に向けた実施体制の拡充

■ 企画運営の実働・サポート体制の拡充

● 「地元活動団体代表主導」体制から「次世代担い手参働」体制へ

- * 事務局企画運営スタッフ → おおすみネット、新規事業実践者、地元後継者
- * 事務局拠点 → ふれあいの里（地区福祉村）施設等と一体となった事務局

● 「サポーターズ制度」の構築

- * 実働の協力者登録（サポーター）
- * 活動支援の基金化（サポートファンド）

■ 外部機関との連携強化

→ 田園地域づくり（ガーデンタウン）先進モデル化への戦略的シナリオづくり

● 市内外の関連活動団体、組織との連携

- * 観光協会、JA等との連携
- * まち活拠点「きちきち」との連携による発信

● 平塚市関連各課との連携継続（持続性確保のための支援体制）

- * 調整区域の休耕地・遊休地の活用 → 農水産課、農業委員会、まちづくり政策課
- * 体験学習の場としての拡充 → 社会教育課、健康課
- * 収益事業への展開 → 産業振興課

16

- 具体的な実施体制は、これまで地域活動の団体の方々、例えば自治会や社会福祉協議会の方々を中心に動かしてきたのですが、やはり実効性ということでは次の担い手の方に、より多く参加していただきたいということで、そういったメンバーの参画、また、活動拠点も今は公民館を中心に行っていますが、もう少し地域のいろいろな施設と連携して事務局機能を持っていくのはどうかと考えています。
- また、サポーターズ制度の構築ということで、協力していただくサポーター、サポートファンド、わかりやすく言うとヒト・カネの部分の体制を整えていければということです。
- 外部との連携強化では、城島スタイルということでスタートしましたが、よくよく考えると、神奈川県西部の田園地域ガーデンタウンというような形で、少し幅広い連携の中でモデル化ということを考えていければと思います。
具体的には、調整区域が多いので、そこでの活用とか、より体験の場としての拡充、収益事業の展開、こういったものを考えていければということです。

第3 今後の取組み

(2) 令和5年度以降の展望

●めざす方向

社会教育・生涯学習の一環として、小中学校、高校、大学ならびに地元民間企業との協力体制のもとで、「**交流型体験の里づくり事業**」から「**多世代交流のガーデンタウン（いきいき田園地域）づくり**」をめざす →

■組織体制

○「城島地区地域活動推進会議」の「里づくり事業実行委員会」を母体に外部機関と連携する**自主運営組織への移行と将来的なNPO法人化**を見据える

+

■財源基盤

○地元農産物加工・商品化、農園レストラン化等、**6次化と販路拡大**をめざす
○周辺地域との連携による交流・体験ツアーの**周遊化、通年化による収入増**をめざす

+

+

■土地・施設の持続的活用方策

○貴重な田園環境を維持しつつ、農地の休耕化、迷惑施設への転用を抑制し、交流や学びの機会・場としても活用していけるよう**土地・施設の新たな活用制度化、規制緩和に向けた関係者協議**に取り組む

学びと交流を通して支えあいながら地域運営していく

17

- 目指す方向としては、今申し上げたことを進めるために、組織化としてはやはり、土地を活用するとか、いろいろなことも含めて、将来的にはNPO化を見据えたいです。
- 財源については、参加費だけの収入というのはかなり厳しいので、農商高校、民間と一緒にになった6次化、ツアー化、体験ツアー化といったことを考えていきたいです。
- また、やはりヒト、カネ、土地がすごく重要だと感じており、圏央道周辺で、土地利用がもうすでに大きく変化している中で、休耕地を地域のために交流の場として使うためには、活用の制度や規制緩和といったことを、関係機関と一緒にチャレンジしていければと考えています。

おわりに

共創社会における身近に農・学びがある暮らし・地域づくり

高齢者はじめ多世代が交流する持続性ある地域運営
高齢者の経験とスキルを活かす“健康”と“生きがい”の創出
「城島スタイル」の発信

かながわガーデンエリア・モデルに向けて



- 城島スタイルをかながわガーデンエリアのモデルにということで、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

3 (平塚地域) プレゼン後の 質疑応答

- (1) 参加者について
- (2) 土地利用について
- (3) 自走化について

3 (平塚地域) プレゼン後の質疑応答

(1) 参加者について

Q1

地域外からの参加者の割合は。また、参加者は固定されているのか。

A1

- ・一番大きい活動は、米・野菜づくり体験教室であるが、ほとんどが地域外からの参加である。地域内にもアナウンスはしているが、自分の家でやっているという理由で参加者は少ない。
- ・きじまるシェについては、地域内1/3、地域外2/3の参加割合となっている。地域内は、小学校にも連絡することにより、児童の両親、祖父母がパンの販売や健康チェック等にスタッフとして参加してくれているが、事業運営への参画には、一歩も二歩も階段を上がっていかなくてはならない状況である。
- ・事業運営への参画に向けては、裾野を広げること、キーになる方に入っていくことが必要であり、親世代の地域教育力ネットワーク協議会、青少年指導員など、新しい形で地域学習を支えていただく方に入っていきたいと考えている。

3（平塚地域）プレゼン後の質疑応答

(2) 土地利用について

Q2

どのようなことが今、課題として挙がっているのか。

A2

- ・後継者の方が少なくなる、施設園芸でハウスなどを展開していた年代の方々がもう続けていけなくなるということで、現地は休耕田が多く、残念な景観にもなっている。
そういったところに、需要のあるトラック、物流関係の事業者などが短期間に進出する展開となっている。
- ・この事業の使い方では、当然それほど収入にならないため、土地所有者に厚意で使わせていただくこととなり、限界があると感じている。
- ・持続性のための活用、暫定的な活動に対して、規制をもう少し緩和していただきたい。

3（平塚地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 自走化について

Q3-1

農産物の6次化や販路拡大、ツアーなどいろいろな事業を展開する中で、収入は確保できるのか。平塚市などからの補助のほか、期待できる財源はないのか。

A3-1

- ・地域側では、米・野菜づくり体験の参加料以外にプラスアルファで販売する形にはしているが、現状ではそれほどの額にはならないので、マルシェ等を展開するのが一つ大きな課題である。
- ・市では、地域課題を解決するために取り組む団体に対して補助金を交付する制度がある。この取組のうち、対象となる部分については、補助を充てたい。

3（平塚地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 自走化について

Q3-2

介護保険制度における一般介護予防事業、生活支援体制整備事業あるいは重層的支援体制整備事業などで支援は可能だと考えるが、現時点で担当課は参画しない中、そうした事業の活用は考えているのか。

例として、長崎県の佐々町が地域包括で、厚労省が高齢者の農福連携で、いろいろな事業をやっている。

A3-2

- ・新しい連携の取組や支援制度について、勉強しているところである。
- ・農福連携については、佐々町の例のように平塚市においても別途動いている実態があり、そうした制度に対して、地域の理解が大きい割合を占めること、また、市の部局についてもプラスアルファということもあろうかと思うので、今後、市の関係各課と、いろいろな制度を紹介してもらいながら、一緒に考えていきたい。

3（平塚地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 自走化について

Q3-3

自走化に当たり、核となる事業、資金源となる事業は何だと考えているか。

A3-3

- ・今年、デイキャンプにチャレンジしたが、その近くにある弁天池を再生して、湧水の辺りの生態系の再現、蛍の里にすることまで考えている。それを活用して、夏休みに泊まりのキャンプができればと思う。
- ・空き家をリノベーションし、サロンのようなところも作っていただいている方がいるので、2泊3日のキャンプでいろいろなことを丸ごと体験できるという形をとっていきたい。里の方のお米などを食べる方と、里山の方のデイキャンプのようなことを組み合わせたいと考えている。今すぐになるかどうかは分からなく、これを資料にピンポイントで書くというところまではまだ至っていないが、そう考えている。

3（平塚地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 自走化について

Q3-4

（Q3-3を受けて）企業協賛という方法もあるが、今は考えていないのか。

A3-4

- ・ぜひ実施したいと考えている。市内には、製造業関係、三共など健康関係、不二家など食品関係といったいろいろな素地、ポテンシャルはあると思っている。
- ・そういう方々にサポーターファンドに御協力いただけるよう、市と協力して動いていきたいと考えている。

4 (三浦地域) プレゼン発表

【三浦地域の課題 (概要)】

【課題解決方法】

【プレゼン資料】 / 【説明者の発言】

4 (三浦地域) プレゼン発表

※詳細は末項「(別表) 個別事業一覧」参照願います。

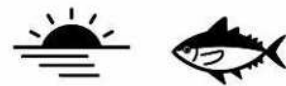
【三浦地域の課題 (概要)】

- 高齢化
- 豊富な地域資源(漁業、自然や景観等)を活かし、メディアなどで発信し交流人口や関係人口を増加させたい。

⇒地域情報を発信する市民記者としていきいきと活躍する高齢者を育成し、三浦市を盛り上げる

【課題解決方法】

- ⇒IT機器初心者もいれば、ITスキルが高く今にもメディアで情報発信できる人もいる。
- ⇒それぞれのニーズに合った支援が必要



令和4年度 地域の支え合い仕組みづくり事業
中間報告会（令和4年11月8日）

高齢者活躍の仕組みづくり支援分野

Don't tell anyone!
地域資源情報を集めて広めて
繋がろう大作戦！

三浦市地域資源情報プラットフォーム推進協議会

第1 概要

令和2年10月(事業開始)時点

○ 本事業のきっかけ

- 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、暮らしの中にステイホームなどの制約が課された。
- このことにより、地域活動、市民活動が停滞した。
- 多くの人引きこもりがちになり先行きの不安に駆られた。

(´Д`)

- 本事業のきっかけですが、新型コロナウイルス感染拡大により、多くの人引きこもりになりました。

本事業の目的／内容

○ 本事業のきっかけ

- 反面、身近な暮らしを見つめなおし、懐かしい記憶、身近な散歩コースの美しさ、母が教えてくれた郷土料理などの身近な魅力を再発見した。
- 時間に余裕があり、経験が豊富かつ、**現代社会が失ってしまった丁寧な暮らしの記憶**があるという高齢世代しか持ち得ていないポテンシャルは価値があるはず。
- これら地域の魅力を少しずつでも集める活動を始めたら停滞ムードも改善できるのでは！

💡 (*'▽')

4

- 反面、ステイホームによって、身近な暮らしを見つめ直す時間ができて、地域の魅力を集める活動を始めるには好機ではないか、という思いがありました。

○ 本事業の目的（その1）

- 活躍の場を見いだせないリタイア後の高齢者が、社会参加のきっかけとなる身近にある地域の良さ＝地域資源を再発見、再発掘し集約する活動に参加し、地域資源情報の集積と発信に貢献できるプラットフォームを作る。

そして！

高齢者が今まで培ってきた経験、知識、記憶、感性、地域の繋がり、地域の仲間などを総動員して、地域の良いところを集め整え記録し発信する活動をすすめる。

高齢者が地域メディアを活性化させる！

5

- 人口4万2千人、高齢化率40%を超える三浦市にあって、リタイアした高齢者の引きこもりを課題として、この世代の特に男性高齢者が地域資源を発見、発掘し、発信する場を作り、高齢者が地域メディアを活性化させることを第一の目的としました。

○ 本事業の目的（その2）

- ・ 高齢者が自分らしく活躍すると、地域の魅力・地域の良さを誰もが知ることのできる仕組みを通じて、市内外へ地域の魅力が伝わります。

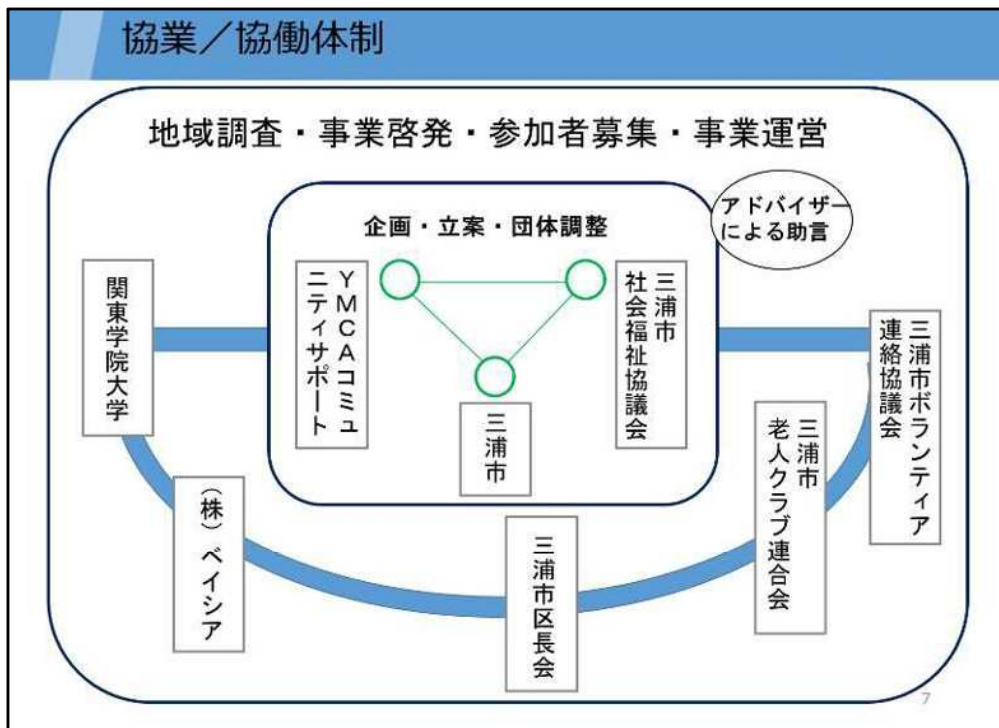


新たに三浦市を好きになったり、移住に興味を持つ市外の人や、三浦市にずっと住みたいと思う若者層が増えることに繋がります。

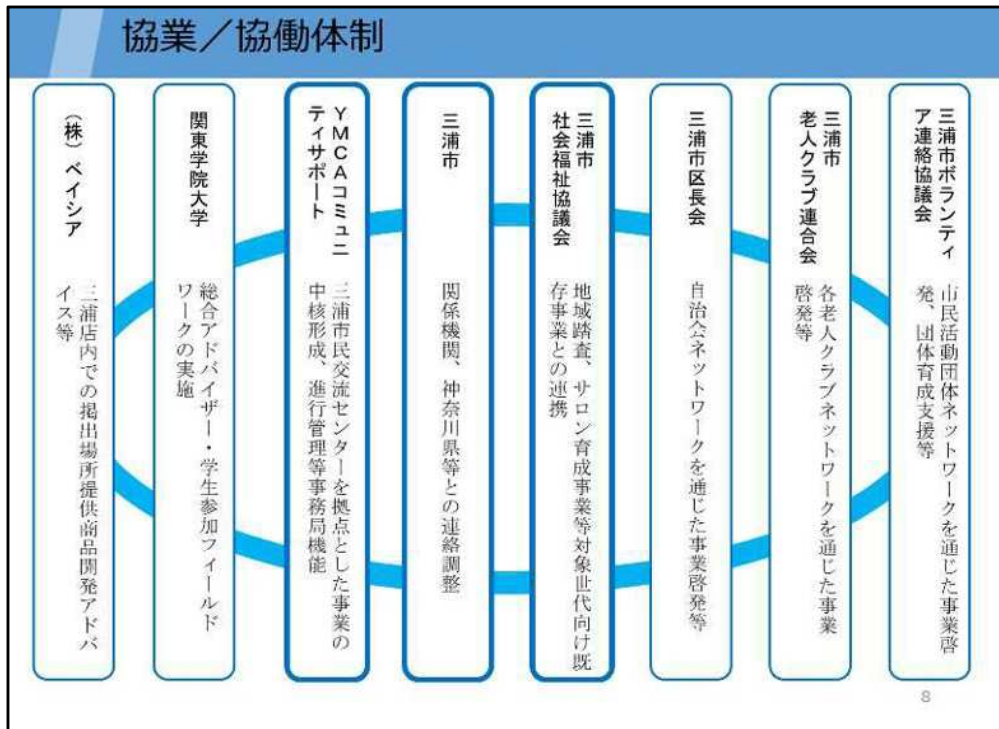


三浦市を好きになり、「地域に対する市民の誇り」の醸成をもたらす。地域のために自分たちも行動を起こす者が増え、三浦市が持続的に市民の力で元気な街になる。

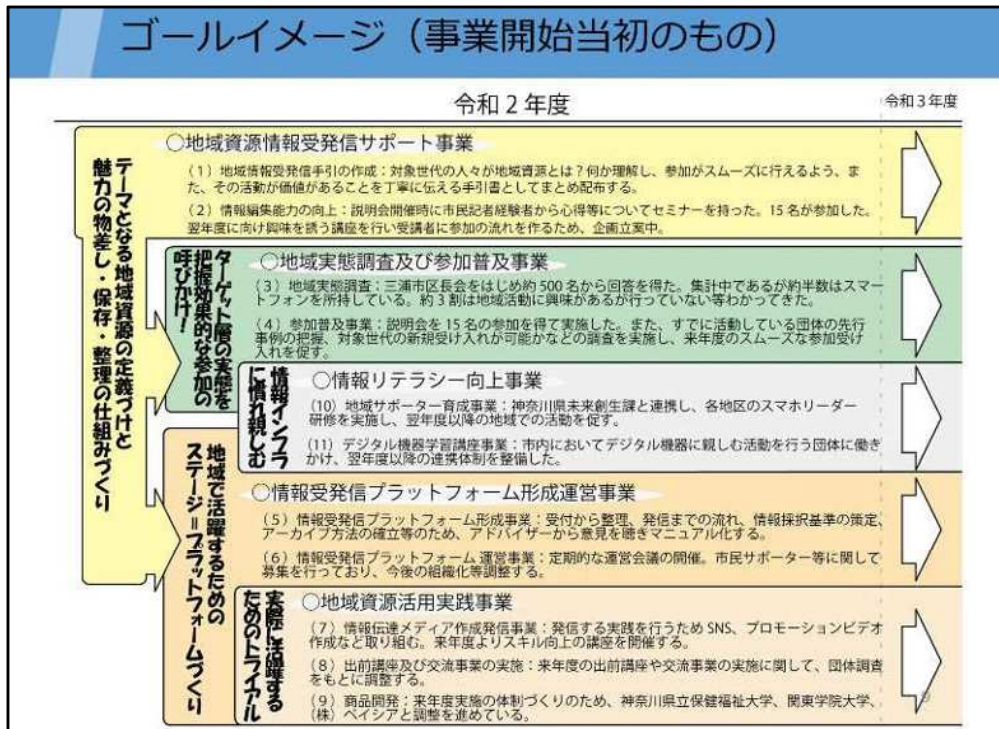
- 第二の目的は、高齢者が活躍していることが地域の魅力となって、世代を超えて三浦のファンが増えて、市民の力で元気なまちになることを目指すということです。



- 本事業のスキームで、三浦市、三浦市社会福祉協議会、三浦市民交流センターの指定管理者であるNPO法人Y M C Aコミュニティサポートの3者が、この事業の企画立案、関係機関の調整役となり、学識経験者や最先端で活動する起業家等のアドバイザーによる助言を受けながら、事業を動かす構想になっています。
そして、地域調査や啓発、参加者の募集、個々の事業運営については、地域住民組織、大学、企業等の協力を得て実施をしていくことといたしました。

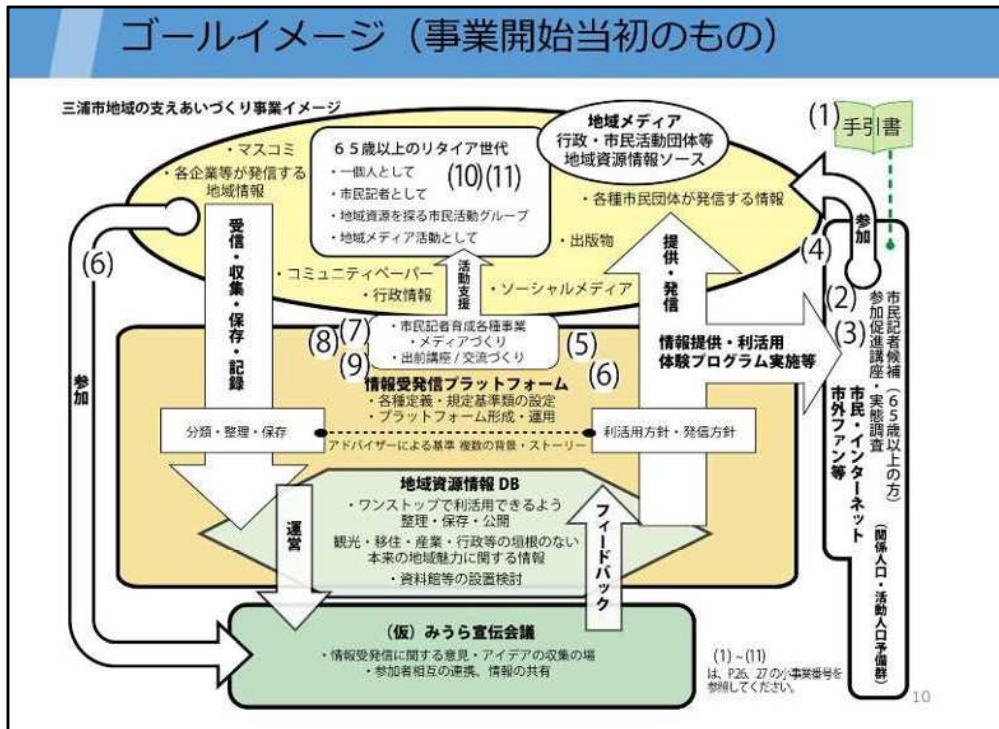


- それぞれの協力体制 8 者でスタートしていますが、まずこの太枠にあります企画立案調整役である 3 者についてです。
- 社会福祉協議会はこの企画の対象である、リタイア後の高齢者世代に対する地域調査や既存事業である高齢者サロン育成事業等の連携を図って事業を進めています。
三浦市は、市民部市民協働課が市役所内の各部局、神奈川県をはじめとした関係行政機関その他関係団体との連絡調整を担当しています。
YMCAコミュニティサポートは、三浦市民、運営する三浦市民交流センターと拠点とした事業の進行管理と事務局機能を担っています。
- 表の右側、三浦市ボランティア連絡協議会、老人クラブ連合会、区長会は、地域住民組織です。それぞれの団体のネットワークを通じた事業啓発や、団体支援事業に関わっていただいています。
株式会社ベシアは、連携企業ですが、三浦市民交流センターが入居している三浦店の店舗スペースの提供や、食をテーマとした商品開発事業等で連携をしています。
関東学院大学は、人間共生学の共生デザイン学科の日高ゼミナールが日高准教授による本事業へのアドバイスやゼミの学生によるフィールドワーク、事業企画等に参画をいただいています。



○ 当初のゴールイメージになります。

○ 本事業は、5つの事業があり、各事業に2、3取組があって、全部で11項目の事業に着手しました。



- 5事業、11の取組がそれぞれに広がりがあるのに、全体として俯瞰し、進行管理をすることの難しさもありますが、個々の取組がうまく機能することによって、最終的には、高齢者が地域メディアを活性化させ、活躍する高齢者がいること自体が三浦の魅力になるという目標に基づいて、さらに続いていく原動力になるイメージを持って始めています。

第2 進捗状況

令和2年10月～令和4年10月



○ 続いて進捗状況について報告します。

○ こちらのテーマ、5事業11項目については、個々について報告というよりは、つながっている部分がありますので、プラットフォームの整備事業として、事業1、2、3に当たる(1)、(3)、(4)、(5)、(6)、情報リテラシー、広聴事業として(10)、(11)、プラットフォーム整備、自走化のところでも活躍できる仕掛け、市民による情報発信の支援として事業4、(7)、(8)、(9)という形で、まとめて報告をしています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ プラットフォームの整備と活動の展開

- ・ アドバイザーの助言により地域資源情報の定義、活動方法等を紹介した活動初動用ガイドブックの作成活用
- ・ ガイドブックを配布し、多様な投稿の参加の呼びかけを実施。（老人クラブ、区長会、各サロンなど約2000部、講座受講者に配布）
- ・ 説明会の開催（4回開催 延べ24人参加、今後も開催予定）
- ・ 説明会・講座参加者による交流会の開催、新たなグループモデル活動の支援に着手。**（仮）部活動支援**
- ・ サロン活動、施設等での参加の呼びかけ。（サロン15箇所等）
- ・ 専用ウェブページでの事業の紹介、参加の呼びかけ
- ・ センターによる地域の基本情報、投稿情報の整理・発信。
- ・ 収集保存マニュアルの作成、新たに作成する活用発信マニュアルを活用し支援するスタッフの育成。

13

- プラットフォーム整備事業として、まずはアドバイザーからの助言によりハンドブック作成からスタートし、説明会や講座を二ナイトカレッジという形で、一元化して開催しました。
ここでは、地域住民組織である老人クラブ、区長会、サロンなどとの連携が功を奏しました。
- また、広報誌やパンフレットにより、初めて参加するリタイア世代と新しいつながりができ、参加者同士が「市民の部活動」と呼んでいる新たなグループ形成につながっています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ プラットフォームの整備と活動の展開



ハンドブック
をベースに
説明会を開催



参加者の交流からグループへ



14

- このようにハンドブックを作りまして、そしてグループができ、それからそのグループが市民記者のブログを運営するような形になっています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 市民による情報受発信の支援

- 活動したいと考える高齢者向けに、多様な情報発信スキル向上のための講座等を実施。→**定着しつつある。**
- SNS、ウェブサイト、コミュニティペーパー、壁新聞など多様な媒体への情報発信のトライアル。→**講座の直後は活発だが続けられていない？**
- 発信されている情報が一元化され周知される体制の整備→**二ナイトのウェブサイトは発展半ば**



- 市民による情報発信としては、二ナイトカレッジとして高齢者向け講座は定着をしています。
- 様々な情報受発信方法で講座を提供していますが、講座が終わると自主的な活動が下火になってしまうという課題を、昨年度の中間報告でもお伝えしています。

○ 市民による情報受発信の支援

- 情報編集能力の向上・情報伝達メディア作成スキルアップを図るため講座群を開催（アナログ系 4回、デジタル系 6回、フィールドワーク系 3回）
- 講座を開催し実践のトライアルを実施する。また、講座後のフォローアップを実施する。
- **市民運営による情報発信サイトの運用開始！**
- 発信されている情報や発信者に関する情報はセンターのウェブサイトやセンターたよりへ掲載。
- 幅広く共有されるため「共通#タグ」などの手法などの利用を呼びかけるとともに発信活動の支援方法を**発信活用マニュアルへ掲載し展開中！**。
- 受信する、交流会に参加するなど**受動的な関わりでも貢献していることを丁寧に伝え地域の繋がりに誘いたい！→美態は把握できないが、、、**

16

- 講座の中で実践練習をし、その後フォローアップをして、習得したスキルを定着、発展できるような働きかけによって、いくつかのグループでできたこと、また、発信まではしないけれども受信することで、地域とのつながりを持ち続けるという層もいて、まだまだ把握は難しいのですが、この層も意識してつながることが重要だと感じています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 市民による情報受発信の支援
市民大学（ニナイテカレッジ）でスキルアップ！

今年3年度 ニナイテカレッジ 年間講座スケジュール

SNS講座では互いにフォロー

市民記者講座 本格取材体験

各種講座の紹介・周知

- 具体的にニナイテカレッジということで、相互に教え合ったり、卒業に向けて実際の取材体験をしたりという形を取ってきました。

○ 情報リテラシーの向上

- 自治会長、社協、老人クラブ向け講座を開催し地域全体への広がりなどスキルアップを図った。
- SNS活用講座を開催する。受講生から徐々に広めていっている→**数値未把握**。
- アンケートにより情報収集等について把握した。**PCを活用したい要望に応え講座を開設した**。
- NHKと連携し全世帯へ防災アプリの案内を送付し導入を促した。

地域の高齢者サロン
・自治会長向け、
老人クラブ等
スマホ教室開催



18

- 情報リテラシーについては、地域の組織の方たちに協力いただいて、実施してきました。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 活躍していることを肌で感じることが
できる仕掛け＝価値の最大化→事例を広めたい

・地域情報の発見・収集・発信
者としての活躍とは？



その情報が地域の魅力・宝物となる



活用される！



19

○ こちらの活動で、私たちが二ナイトカレッジを通して見えてきたことに、この魅力をこれから自走化していく中で広めていきたいということがあります。この後少し事例を御紹介します。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 活躍の事例（その1）

- ・三浦海岸秘密のウォーキングコース誕生！
- ・三浦市区長会の呼びかけから情報提供→社協へ・市
広報紙へ



自治会長からの情報提供から社協主催：未病ウォーキングに採用。市内外から定員を超える参加があった。

散歩・自転車コースとしてアクティビティ化も可能！

健康コース 古墳見学も
散策好き市民が発案

神奈川新聞へ掲載

20

魅力情報が市の広報紙表紙へ

- まず一つ、活動を通して今まで実施した未病ウォークも、自治会長の方たちから情報を提供いただいて、社会福祉協議会主催の広報活動、未病ウォークに発展するような形ができてきました。そして、ミニコミ誌や市報に、それが広報されるような形が出ています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 活躍の事例（その2）

- 三崎地区おすそ分け習慣から生まれた食文化発掘
- 社協サロン活動の呼びかけから情報提供→県立大学の協働へ



季節の特産品が大量に採れる時期に地域で流通するおすそ分けの習慣から、多彩な料理方法が生まれていた！



社協がサポートする高齢者サロン事業からの情報を基にグループインタビュー・フィールドワークを実施、重要な発見が！

消滅危惧される習慣を大学の研究として記録化に取組中！



タウンニュースへ掲載

21

- もう一つは、三浦の特徴として育てようと、学生たちが関わることで、地域の高齢者サロンの方たちとつながって、新たなレシピ開発で三浦の地域資源のいいところが発見できるような形で、今月もまた集まり、レシピを交換するような活動に発展しています。

実績／成果（達成項目、未達成項目など）

○ 活躍の事例（その3）

- 手芸系クラブが大学生とプロダクト開発へ！
- 市民交流センター利用者から協力申出→関東学院大との協働へ



三崎港特産である大漁旗の端切れを活用したピクニックバッグを大学生がデザインし、地元手芸系クラブが製品化を目指す。（画像はイメージ）



自転車×ピクニックで三浦の地域の魅力ポイントを巡る体験を提案予定の学生たちが、ピクニックグッズも地元で生産したいとの思いでマッチングへ



横須賀パッチワークキルト協会代表者とゼミの皆さん

不要となった大漁旗×手芸系クラブ×大学生の掛け算が実現！

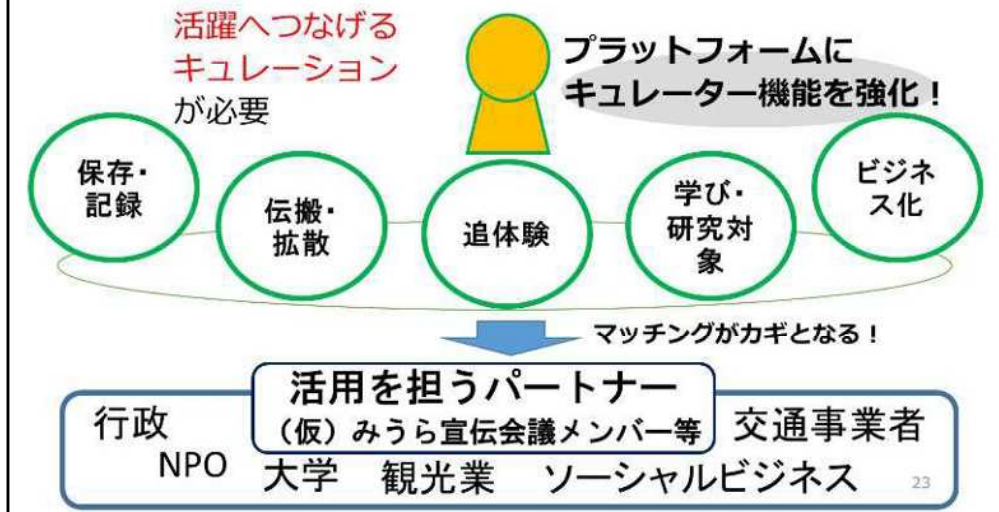
タウンニュースへ掲載

22

- また、関東学院大学との交流の中では、三浦に余っている大漁旗を使った観光資源とニナイテカレッジに登録している団体が共同して、新たな商品開発を行うようなことにもチャレンジをしています。

振り返り／課題など

- 活躍の事例からわかってきたこと
 - ・提供された各情報を活用できるフェーズへ



- 次に振り返りをして、課題として分かってきたことです。
- 活躍していることを肌で感じる仕掛けとして、いろいろ取り組んできたのですが、実際にこの活動をつなげていく、参加して下さった高齢者の方の背中を押す、コーディネーターやプラットフォームに振られた機能をもう少し強化していくことが必要になっていくことが分かってきました。

振り返り／課題など

自主的な活動がなかなか発展しない。

- 一般的に呼びかけても始まらないと想定し、講座や説明会への参加者から活動者に展開するスキームだった。
- 講座や説明会の受講者はある程度やる気もあり方向性を持っているが、活動はなかなか始まらなかった。
- 原因は特定できていないが、デジタルへのアレルギーと初動期に伴走を求めているためではないかと推測した。
- 対策として、「デジタル系講座のフォローアップ」「発表の足慣らしの場」「仲間集め」等を展開することに。

「丁寧な暮らしの記憶」の価値ポテンシャルは高い。

- 高齢者の貢献は懐疑的な印象を持たれたかもしれない。しかし、事例からも「手仕事・手作り」「家族や近隣者へのやさしさ習慣」「写真撮影などのノウハウ」など宝の山だということがあらためて認識できた。

**コンサル、コーディネート、キュレーション、マッチング
が成功のカギではないか！**

24

- 参加してくださる方たちは、それぞれのつながりの中でいらっしゃるが、そこから先、自分たちで手を挙げて旗振り上げになってやっていくということがなかなか難しい。
これは昨年からもいろいろ取り組んでいて、伴走支援をしていく必要があるということで、受講が終わってからの働きかけをやってきています。
- 対策として、赤字で書いていますが、パソコンやSNSの講座の後のフォローアップ、発表の場の足慣らしの場、仲間見つけといった働きかけを行っています。

協業／協働による効果・地域の変化等

市民交流センター・社協・市の連携が実現

- 市民目線でわかりやすく事業に参加してもらうため、既存の市民活動向け事業を再構築し、ノウハウの取得、活動の発表、市民との交流、マッチングを市民大学化した。
シームレスで多様な選択ができる学びと発展のプラットフォームが定着化しつつある。（ニナイテカレッジ）

三浦市区長会による写真に特化した事業へ発展

- コロナ禍で若い世代との接点を失った自治会活動を身近に感じさせる機会として写真コンクールを展開中である。



「地域に魅力がある」こと、「市民が活躍できる」ことが地域に徐々にではあるが伝わっているのではないか。

25

- また、今年2年目になるニナイテカレッジの中では、昨年参加した方と新たに参加してくださった方たちがつながって、それぞれいいところを探すようなことをしたら、たくさん出てきました。
- これは多世代にわたり、65歳未満の方もサポーターとして関わっているのですがそういう方たちが新たに、高齢者の方たちが行っている体験をとっても価値のあるものと評価することで、高齢者の方たちがそのことに価値を見出すということが見えてきました。
- また、協働効果、地域の変化ですが、調整役に関わっている連携が良い形で進んでいるということがあります。
- 一つには、今年から、老人クラブ連合会の事務局に社会福祉協議会がなったことで、ますますつながりが大きくなりました。
また、三浦市の区長会は、自分たちで写真コンクールを展開したり、新たな働きかけ、広がりにつながっています。

第3 今後の取組

令和4年11月～令和5年3月

スケジュール（目標等）

○ 令和4年度に実現させる項目

プラットフォームを堅牢な体制に

- ・ **高齢者のサードプレイスとして**、いつでも立ち寄れて、経験豊富なスタッフがいる。活動している仲間もいて、自由に活動を始め続けることができる場として、周知し利用を促す。またマニュアルを活用し体制を維持する。

参加したいと思える活動へ

- ・ 活動している姿に誇りを感じることができ、成果も地域貢献につながっていく。「地域貢献できる活動」を表現するイメージづくりを行う。

情報の収集・活用を進めるため収集される情報の「知財」としての位置付けの検討

- ・ 現在、情報の収集は進めている。これらの分析や活用について、アドバイザーに意見を聞きつつ体制を整える。

27

- 今後の取組についてですが、高齢者の方たちのサードプレイスとして、立ち寄れる場の提供、プラットフォームとしての体制に今年度は取り組んでいます。その周知を促していくこと、マニュアルを整えていくことを続けています。
- また、参加したいと思える活動ということで、声かけを続けていきますが、それがきっかけで地域に貢献できるということを皆さんに伝えていきたいと思っています。
- そのために、アドバイザーに意見を聞きたく、今年中にもアドバイザーの方と集まる予定にしています。

スケジュール（目標等）

○ 令和4年度に実現させる項目

活躍の後押し！体験プログラムのアクティビティ化の実証

- ・ 埋もれた地域資源は活用次第では唯一無二の体験となるため、今年度も体験プログラム化を視野に入れ**キュレーション・マッチング**活動を展開する。

さらなる新規グループ育成化等初動活動支援の継続

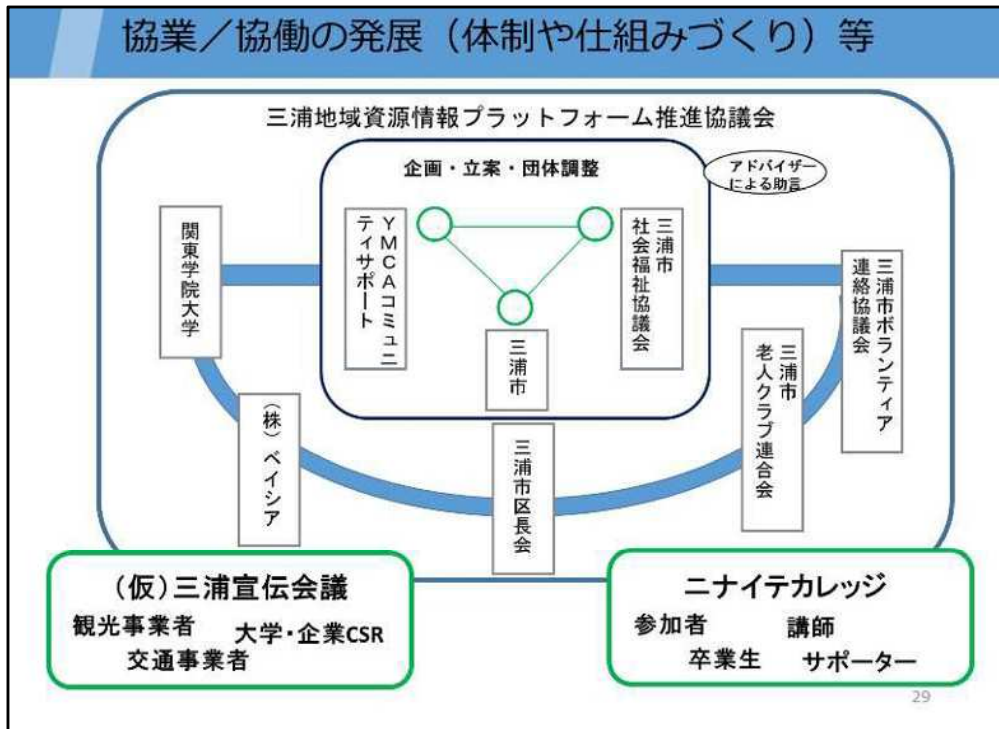
- ・ グループの活動が活発になると、ノウハウの蓄積やネットワークの構築などが図られ波及効果が期待できるため市民活動のスタートアップ「**(仮)三浦で部活動!**」を支援する。

継続的な大学・企業CSR等との連携事業の実施

- ・ 本事業として、また、インターシップとして本年も5～6大学の学生を受け入れる。また、デジタルデバイド解消のため、デジタルビジネス企業との協働を実施する。

28

- そして、活動の後押しということで、いろいろな体験をマッチングするキーパーソンというのが大変重要になりますので、そちらの方の展開をしていきます。
- また、今、2～3の新しいグループが集まって活動を始めていたり、団体を立ち上げたりということが見えてきています。
そういったことを「部活動」と呼んでいます。そういったものがいくつかでき、そして、アドバイザーや二奈イテカレッジの講師の方が、顧問のような形で関わることで、ノウハウを蓄積することを考えています。
- また、継続的な大学や企業のCSRとの連携ということで、インターンシップの方が関わってくださったり、企業の方が講座の企画を一緒に考えてくださったりという形になっています。



- 今後ですが、最初に話をした企画立案の3者、そして協働につながっているメンバーとの体制は、このままいい形で進めていけないのではないかと考えています。
- それに加えて、ニナイテカレッジに関わった参加者や講師の方たち、これから関わる人たち、そして今までお世話になっている連携の各セクターの方たちと、今考えている三浦宣伝会議というような発信のプラットフォームを作っていくと考えています。

自治会加入率の高さとネットワーク力

- ・ 約95%の自治会加入率と54区のネットワークが存在する。しかし、役員不足等将来の自治会運営は不安が山積されている。地域の魅力の共有は自治会運営にプラスだ。

老人クラブの運営が社会福祉協議会へ

- ・ 令和4年度から「老人クラブ連合会」の事務局が社協へと変更となった。このため高齢者とのコミュニケーション環境の向上が図られることに。

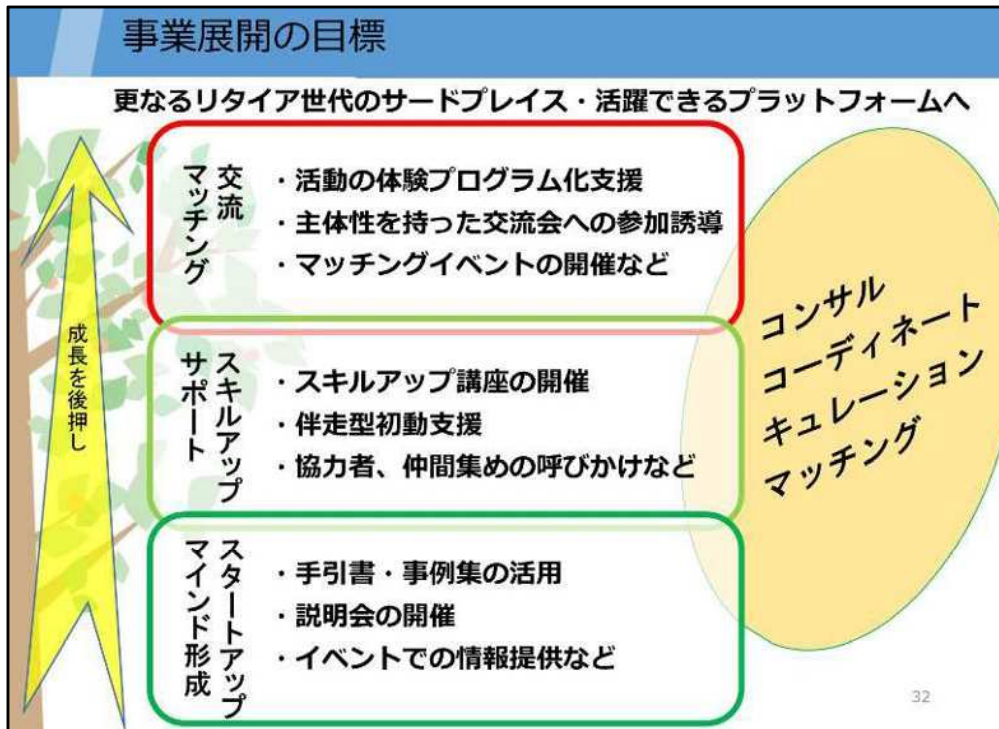
一歩目を踏み出せない活動予備軍のサポートが重要

- ・ 意識が向いていても始めることを躊躇する人たちへのサポートが必要。対策としては、事例集、フォローアップ、グループ化支援、伴走型ブログ記者活動などを展開。

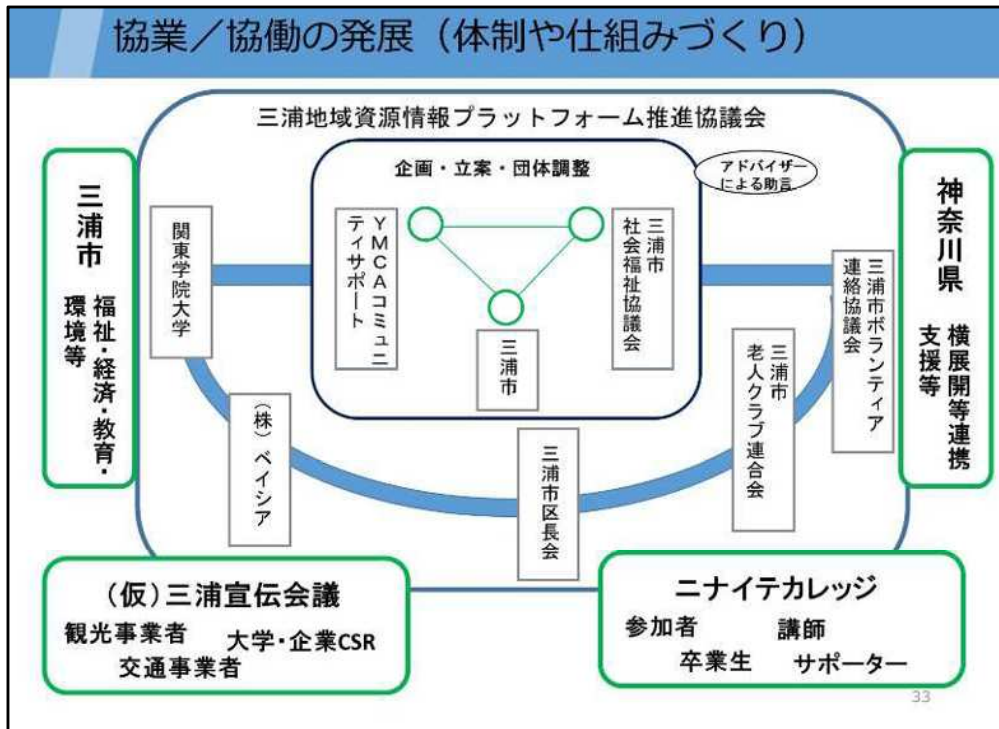
- 課題については、三浦市は自治会の加入率が高いので、こちらを生かしていく。老人クラブの運営、社会福祉協議会とのつながりがあるので、これからもコミュニケーションを通じてやっていきたいと考えています。
- また、自分から中心になって何か発信するのではなくて、情報を受けるような、まだ一歩目が踏み出せない方たちの存在を忘れずに、声掛けをしていくような仕組みを作っていきたいです。

第4 今後の取組2

令和5年4月(自走化後)



- 最後に、今後の取組についてですが、これからも最初に作ったスタートアップの手引きを使って、スキルアップの伴走の形、仲間集めといったこと、そこからまた次の体験につながっていくような成長の循環を作っていきたいと考えています。



- こちらが最終的な仕組みということで、つながっているものそれぞれの連携と、今、三浦市の中でも各部局との協力関係ができてきていますし、神奈川県の皆様からも毎回アドバイスをいただいて協力をいただいていますので、引き続きつながりを作っていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

4 (三浦地域) プレゼン後の 質疑応答

- (1) 活躍しているリタイア高齢者の暮らしの例
- (2) リタイア後の男性のつなげ方について
- (3) 関東学院大学との連携及び成果について
- (4) 自主的な活動の促進について
- (5) 持続可能な地域社会に向けて

4 (三浦地域) プレゼン後の質疑応答

(1) 活躍しているリタイア高齢者の暮らしの例

Q1

当初の事業としては、活躍の場を見いだせないリタイア後の高齢者が対象ということだが、逆に活躍しているリタイア後の高齢者の情報が役に立つのではないかと考えると、活躍しているリタイア高齢者の暮らしの典型例を教えてください。

A1

- ・最初に作成した、「地域の魅力集め方ハンドブック」の中で、地元で様々な活動している方々を紹介している。
- ・加えて、この事業に関わっている方々、講師として参加する方や、私たちがフィールドワークとして訪ねるそれぞれの地域で、まちづくり、健康、未病などに関わっている方々と出会うようなことができている。

4（三浦地域）プレゼン後の質疑応答

(2) リタイア後の男性のつなげ方について

Q2

リタイア後の男性をつなげていくことを狙いとしていたが、なかなか難しいと思われる中、どういう課題があると今認識しているか。

A2

- ・きっかけがなかなかないということがあり、セミナーのような形だと参加しやすいと感じている。
- ・実際に二奈イテカレッジの参加者を見ると、平均年齢80歳ぐらいで、男女は半々である。当初は女性が多い前提で課題設定していたが、今は男性高齢者、一人暮らしの方、リタイアして移住してきた方も多く参加している。

4（三浦地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 関東学院大学との連携及び成果について

Q3

関東学院大学との連携においてゼミ生が関わっているという話もあったが、どういう成果が得られているのか、もう少し教えてほしい。

A3

- ・日高先生のゼミは、特にモビリティで点と点を結びつけるということと、地域の魅力に携わっている方を訪問し、魅力の背景等を学生たちとともにどう表現していくか、例えばプラットフォームのプロトタイプと一緒に作成したり、その人が持っている技術的な意見を引き出し、ゼミ生と一緒にわら細工に取り組んだり、稲作の循環をどう見せていくかという研究だったり、それぞれの方のスペシャリティ、得意分野について、学生とそれをどう結びつけていくか、市内にどういう分布があって、どうやって楽しんでいけるかといったところをまとめていただくをお願いをしているところである。

4（三浦地域）プレゼン後の質疑応答

(4) 自主的な活動の促進について

Q4

参加はしたものの、その後の自主的な活動に至らないことが、どこでも課題となっているが、1年2年かけても諦めずにアプローチし続けると、何かふときっかけを持って、そこから自主化することがある。グループができたという話もあったが、その辺りをうまく手を掛けていけている、伴走支援をしているのは、センターの職員なのか。

A4

- ・伴走支援は、二ナイテカレッジのスタッフ、社会福祉協議会、三浦市市民協働推進課など事業によって異なる。撮影のグループなどは、講師の先生が率先してLINEのグループを作ってくれ、いくつか動いているところである。

4（三浦地域）プレゼン後の質疑応答

(5) 持続可能な地域社会に向けて

Q5-1

持続可能な地域社会に向けて、自治会加入率の高さとネットワーク力を生かしていくということだが、「うちの自治会は何人参加で、こんなことをやった。」といった自治会同士の情報共有、「あの自治会がやったのなら、うちもやらないと。」となったりすることはあるか。

A5-1

- ・三浦市は大きく3つに分かれ、3つに分けた自治会のネットワークがあり、それぞれが大体15、6ぐらいのグループから構成されている。
- ・コロナ禍になってからは、例えば代表者同士が道端でコミュニケーションを取ったり、ばったり会ってなど、コミュニケーションが伝播するということは非常に多い印象であり、噂話的に広がっているかとは思っている。
- ・なかなか情報の伝達が難しいため、逆にそういうコミュニケーションをうまく活用できないかとは思っているところである。

4（三浦地域）プレゼン後の質疑応答

(5) 持続可能な地域社会に向けて

Q5-2

現時点で継続が難しい、体制的に無理があるといったことは、あるか。

A5-2

- ・ニナイテカレッジについては、専門的な講師の方たちを呼んで、多くの講座を実施しているため、今の段階があつての講座と思っている。
- ・そのため、次年度以降はそう多くはできないと思っているが、逆に、集まってきたグループの方たちが講師になったり、今、実際に新たに団体の活動になり、「部活動」と呼ばれるような団体も立ち上がって、自分たちが会費を集めて活動するような形も出現しているので、その辺をうまくコンバインできればいいと思っている。

6 (藤沢地域) プレゼン発表

【藤沢地域の課題 (概要)】

【課題解決方法】

【プレゼン資料】 / 【説明者の発言】

6 (藤沢地域) プレゼン発表

※詳細は未項「(別表) 個別事業一覧」参照願います。

【藤沢地域の課題】

- 藤沢市の引きこもりは人口比で4千人弱いるとされる。
- 引きこもりの支援は、次の1～3のステップに分けて考える必要がある。
 - 1 外出し、体を動かし生活リズムを整える
 - 2 集団行動を行う
 - 3 職場が求める生産性で働く

【課題解決方法】

⇒農業はステップ1と親和性が高く、非常に有効である。また、自治体、NPO等との協働により、ステップ2、3に繋げていく必要がある。



令和4年度 地域の支え合い仕組みづくり事業
中間報告会（令和4年11月8日）

引きこもりへの支援分野

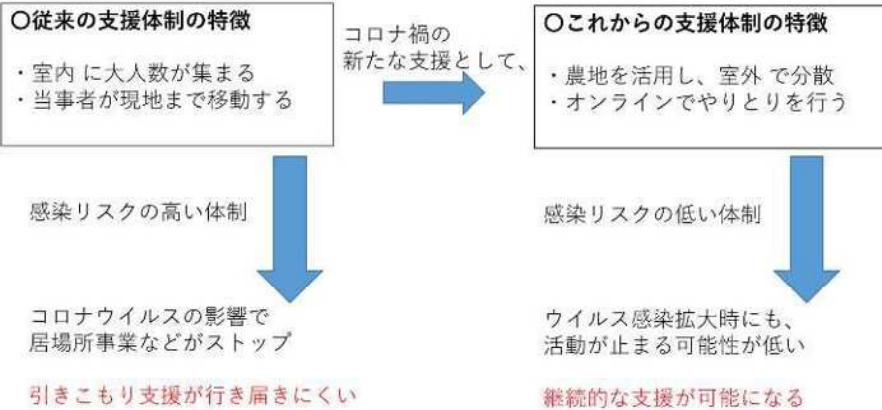
新しい支援様式 農園を引きこもりの 活動場所に！事業

藤沢市農ネットワーク

- 藤沢市農ネットワークでは、引きこもりの方への新しい支援様式として農園を活用した支援事業を行っていますので、本日は、これまでの進捗と今後の方針について、発表します。

第1 概要

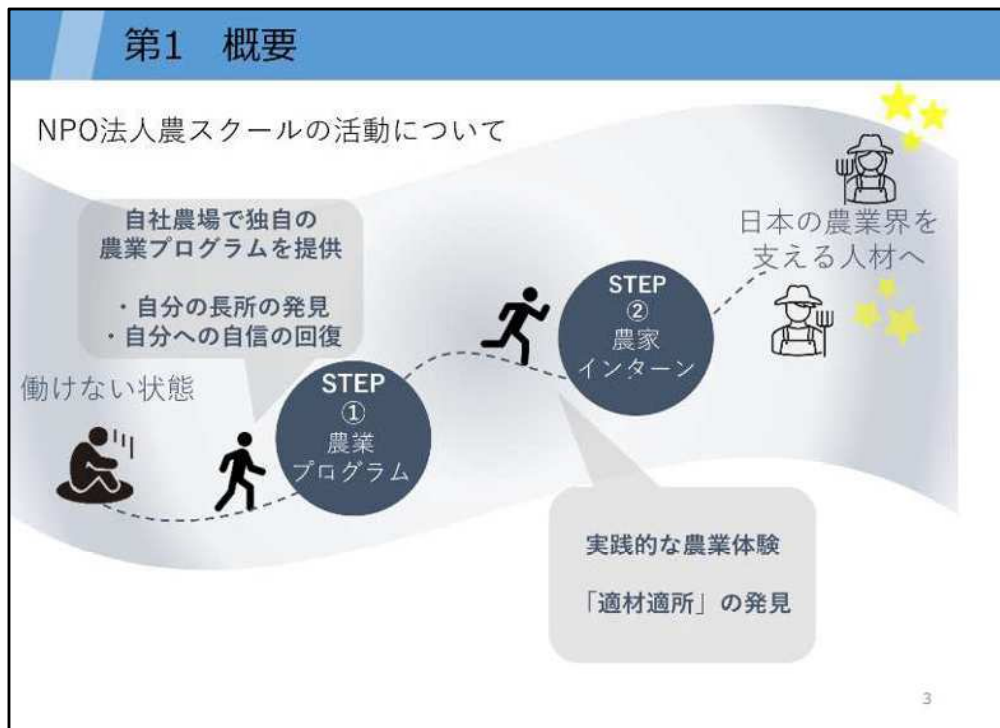
事業目的
農園を使った分散型の引きこもり支援体制を作る



2

- まず、今回の事業目的として、農園を活用した分散型の引きこもり支援体制を掲げています。
- 農ネットワークでは、屋外の農園を活用した感染リスクが低い体制をとっており、コロナ禍での新たな体制として継続的な支援が可能になるものと考えています。
- 以下、体制を確立するための組織の形態と活動の内容について報告します。

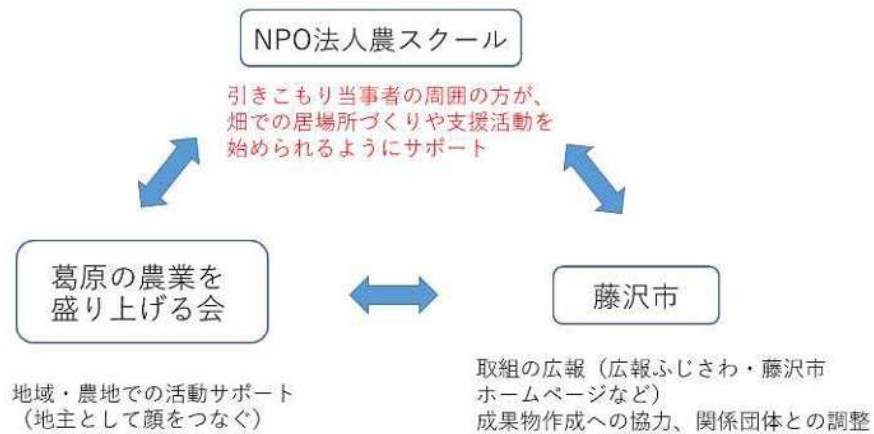
第1 概要



- 前提として、NPO法人農スクールが実践しているプログラム活動について簡単に紹介いたします。
- 農スクールでは、様々な事情で働きづらさを抱える人々に対して、農作業を活用した就労支援プログラムを提供しています。
全6か月のプログラムになりますが、前半3か月では、自社農場での農作業により体とメンタルを整え、後半の3か月間で近隣の農家の方へのインターンを通じて農業の基礎的スキルを習得し、希望される方は、農業法人の雇用就農を目指すといったものとなっています。

第1 概要

藤沢農ネットワーク 構成団体と役割



- 事業開始当初の協議体内の役割と相互連携の流れについて報告します。
- 農スクールでは、引きこもりの方の家族や近くの支援者が野菜づくりを身に付けて、畑での居場所づくりや支援活動を始められるよう、その活動サポートを主な目的としています。
- 藤沢市の地域共生社会推進室では、農スクールの活動のサポートとして広報や調整役を担っています。
- 葛原の農業を盛り上げる会は、農スクールが使用している農地の地主で構成されているものですが、地域での活動をサポートしています。

第2 進捗状況

事業報告 1 農業の始め方テキスト作成、配布

藤沢市と協力して、
市民農園や、居場所
事業「地域の縁側」を
紹介するページを作成

野菜づくりを始めるための情報や支援場所の情報が載った
テキストの作成（2020年10月～2021年3月）、配布（2021年4月～2022年1月）

2500部印刷	
1500部ほど配布	
神奈川県共生推進本部室	10部
藤沢市農業水産課	125部
藤沢市地域共生社会推進室	125部
メンタルホスピタルかまくら山	10部 (鎌倉市)
さかい内科・胃腸科クリニック	250部 (鎌倉市)
ココロまち診療所	10部 (藤沢市)
慶應藤沢イノベーションビレッジ	20部
藤沢市地域の縁側	各1部
くまもと湘南館	280部

5

- ここからは、過去2か年の事業について順を追って報告します。
- まずは、2020年度、農業の始め方を紹介するテキストを作成して、県内各地に配布を行いました。
- こちらは畑という居場所の作り方があるという手法をお伝えして、野菜づくりの始め方や、市民農園、支援場所について紹介させていただいた冊子となっています。

第2 進捗状況

事業報告 2 農業の始め方HP・動画作成

藤沢市ホームページにて
農福連携の取組紹介
ページを作成

野菜づくりを始めるためのHP・動画の作成 (2021年4月～10月)



HPから動画にリンク



市民農園の場所を調べられる地図



- 続いて情報サイトのホームページ、「藤沢市農ネットワーク」というホームページを作成しました。
- こちらでは、野菜づくりの基本的な知識や、市民農園の選び方などを紹介するとともに、項目ごとに農作業を説明する動画を掲載しています。
- こちらと関連して藤沢市のホームページに、市内の農福連携の取組を紹介するページを作成し、農業の始め方についての情報と畑を通じた居場所づくり事業について紹介を行っています。

第2 進捗状況

事業報告3 畑オープンデーの開催

引きこもり状態の方の周辺の方を
対象にした農業体験会・相談会を実施
(2021年6月～2022年3月)



広報ふじさわやFacebook広告などで広報

農の力で一歩踏み出す
畑オープンデー

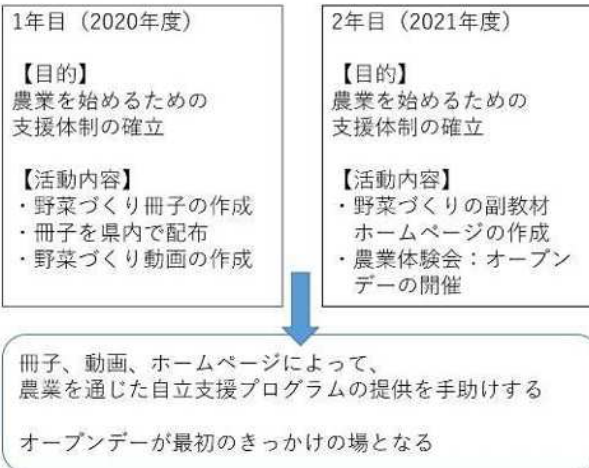
【参加者】

6月28日	7人	11月29日	1人
7月26日	6人	12月27日	5人
8月30日	3人	1月31日	4人
9月27日	8人	2月28日	4人
10月25日	9人	3月28日	2人

- 事業報告3つ目として、2021年度、家族や身の回りに引きこもりの方がいる参加者に向けて、畑での居場所づくりや支援活動を始める最初のきっかけとして、畑オープンデーという農業体験会を月1回開催しました。
- こちらは、広報ふじさわやフェイスブック広告などで参加者を募り、延べ49名の方にこれまで参加いただきました。

第2 進捗状況

農園を使った分散型の支援体制を広げるためには？



8

- ここまで、過去2か年の成果をまとめたのがこちらのスライドになっております。
- 2020年度、2011年度では、冊子、動画、ホームページといった、野菜づくりの副教材の作成と同時進行で、毎月の農業体験会を開催しました。

第2 進捗状況

事業1年目（2020年度）～2年目（2021年度）課題

いかに次のステップの場を増やせるか

農業に興味を持った人に対して、野菜作り冊子・動画・オープンデーの開催など農業に関わる方法を周知してきたが、受け皿となる場所と担い手の人材不足のため支援が十分に広がっていない

〈対策〉

働きづらさを抱える人に対しての農業スキル+人材育成スキルを持った農スクールのノウハウを提供

↓

担い手となるトレーナー（農業を通じた自立支援プログラムを運営できる人）を各所に増やす

↓

トレーナーの存在が、次のステップに進める人を増やす事につながる

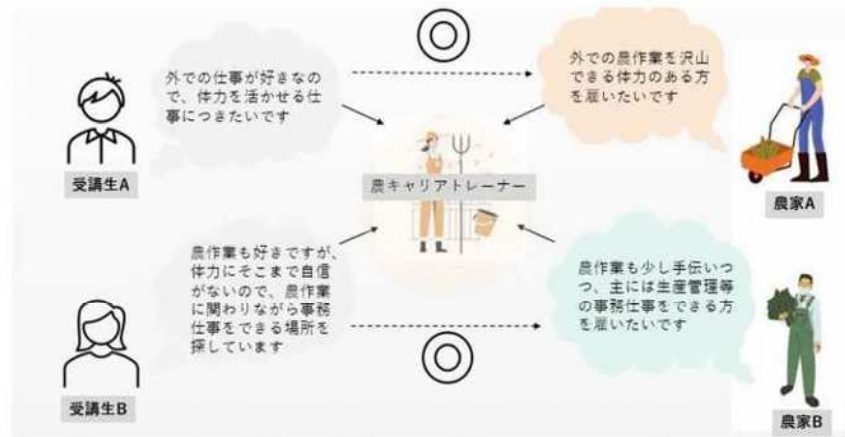
9

- そうした2年間の活動を通じて生じた課題が、いかに次のステップの場を増やせるかというものです。
- 引きこもりの方の支援には、農福連携のようなプログラムの場所があって、その存在が当事者まで届くことがまず第一歩だと考えています。
ただ、現状の取組だけでは、受け皿となる場所や担い手が不足していることにより、支援の場がなかなか広がりにくいという課題が生じてきました。
- そうした課題を解消するためには、農スクールがこれまで培ってきた農業のスキルと自立就労支援のスキルのノウハウを提供することで、自らが主導してプログラムの担い手となり得る人材を育成する必要があるのではないかと考えました。
- そうした人材のことを「農キャリアトレーナー」とここでは定義しています。

第2 進捗状況

農キャリアトレーナーの役割

受講生の特性や希望就労スタイルと、就職先が求める人物像を把握し、お互いにとって良好なマッチングを図る



- それでは農キャリアトレーナーの役割について、もう少し具体的に紹介いたします。
- ここでは一つの例として、農業を職業にする雇用就農のサポートを行う場合の役割について報告します。
- 農業を職業にする場合は、その職場の農作業の内容によって、体力や一定の作業を反復する力や周囲と連携してコミュニケーションを取る力など、職場によって求められるものは多様になってくるかと思います。
- 農キャリアトレーナーは、プログラムの過程で受講生の特性、資質や本人が希望する就労スタイル、その受け入れ先となる就職先が求めている人物像をそれぞれ把握して、就農後の両者のミスマッチを防ぐ役割が求められています。

第2 進捗状況

農園を使った分散型の支援体制を広げるためには？

1年目（2020年度）

【目的】

農業を始めるための
支援体制の確立

【活動内容】

- ・野菜づくり冊子の作成
- ・冊子を県内で配布
- ・野菜づくり動画の作成

2年目（2021年度）

【目的】

農業を始めるための
支援体制の確立

【活動内容】

- ・野菜づくりの副教材
ホームページの作成
- ・農業体験会：オープン
デーの開催

冊子、動画、ホームページによって、
農業を通じた自立支援プログラムの提供を手助けする
オープンデーが最初のきっかけの場となる

3年目（2022年度）

【目的】

農キャリアトレーナーの認知
拡大・育成

【活動内容】

- ・トレーナーのプログラム
運営に役立つ動画の作成
- ・トレーナー育成講座を開催

プログラムの担い手を育成、
ひきこもり支援を担う場所を
各地に広げる

11

- そうした新たに見えてきた課題、支援場所と担い手が不足しているといった課題を踏まえた今年度の事業計画がこちらとなっております。
- 2022年度は、引きこもり支援の場をより各地に広げるために、自らが支援の担い手となるようなトレーナーの育成に活動をシフトして進めてきました。

第2 進捗状況

事業報告4 農キャリアトレーナーの認知を広げる動画作成

農スクールプログラム修了後に雇用就農している方、
雇用者である農業法人の方々へのインタビュー動画を撮影（2022年8月）



藤沢市ホームページにて
動画紹介予定



就職後のゴールイメージを共有
する動画として、農キャリア
トレーナーに興味がある人にみ
てもらうために活用

12

- 今年度2022年度の事業報告ということで、ここでは2つ、報告いたします。
- まず一つは、農キャリアトレーナーというものの認知を広げるため、インタビュー動画を作成しました。
- こちらは、過去に農スクールのプログラムを修了された後、農業法人に就職された方、あるいはその方が現在働いているところの雇用者へのインタビュー動画をそれぞれ作成したものとなっています。
- これによって、農業を通じた自立支援プログラムの効果や、そこを受けられた方の就職後の様子を知ってもらい、就職後のゴールイメージを共有できる動画となっています。

第2 進捗状況

事業報告5 農キャリアトレーナー育成講座を開催

農キャリアトレーナー講座 「誰もが農業を職業と食糧に」の階層別研修 を開催

【講座内容】

- ①農スクールの活動紹介、現状の課題
- ②農キャリアトレーナーとは
- ③トレーナーの活動事例、農福連携に向けた今後の課題(階層別で内容は異なる)

【参加者】

9月22日 3人 10月25日 13人
藤沢市東部民児協 低所得者部会、
藤沢市CSWの方々を含め、
就労困難者の就労や農業者の人手不足問題に
興味関心を持った方々が参加

農キャリアトレーナーの実践現場での心得

- 自分自身の心身の健康を、常に保つことを怠らざる
- 人間の脳は、無意識のうちに「先入観」に引きずられてしまう構造であることを自覚しておく
- 受講生の1年後、5年後、10年後、20年後を整備して対応する
- 言葉ではなく行動を見る



- 今年度の事業報告の2つ目として、農キャリアトレーナーの育成講座を開催しました。
- こちらは、オンラインと会議室内での屋内開催をそれぞれ1回ずつ実施して、藤沢市の民生委員やコミュニティソーシャルワーカーの方や、就労支援施設に勤めている方など、合計16名に参加いただきました。
- 参加者の前提知識や会社によって内容は多少異なるものでしたが、共通して就農支援プログラムの活用方法や現場でこういった課題が生じているのかを実践的に紹介した講座を開催しました。

第2 進捗状況

事業3年目（2022年度）課題

いかに農キャリアトレーナーを増やせるか

2022年度：農キャリアトレーナー育成活動

①トレーナー向け動画作成 ②トレーナーの認知を広げるため入門講座開催
トレーナーの資格取得に繋げるためには？

↓
農業スキルと人材育成スキルを身に付けるために
より専門的・実践的な学びの場を提供する必要がある

農業スキルを教える



メンタルトレーニングの実施



14

- それらを踏まえた考えられる課題というのが、今後いかに農キャリアトレーナーを増やしていけるかです。
- 今後、担い手となる農キャリアトレーナーを増やすためには、農業スキルと人材育成ステージのどちらも習得するために、より専門的かつ実践的な学びの場を提供する必要があるのではないかと考えました。

第3 今後の取り組み

令和4年度11月～ 支援体制の確立、トレーナー育成のための事業計画

令和4年度 11月～3月

取り組み①

トレーナー向け動画の編集、動画を活用した広報活動の展開

藤沢市ホームページなどに掲載し
農キャリアトレーナーの活動を周知
⇒トレーナー希望者への情報提供を行う

【ゴールイメージ】

トレーナー育成を通じて、働きづらさを抱える人・人手不足の農業界を繋げる活動をより広範囲で行うことができる。

令和5年度 4月～

取り組み②

農キャリアトレーナー階層別研修を提供

【目的】

トレーナーの担い手希望者に対して、
プログラム実施の為に求められる
農業スキル・人材育成スキルを提供する

15

- そういった課題を踏まえて、今年度の残り期間と令和5年度以降の事業計画について報告します。
- 引きこもりの方ですとか働きづらさを抱える人が、社会との接点を持つために分散型の支援体制を作るのを大きな目的としています。
そのためには、まずは現状について広く周知し、問題意識や興味関心を持つ人をひとりでも増やす必要があると考えています。
- そのために、トレーナー向け動画含め、農ネットワーク全体の活動内容について、藤沢市のホームページ等の媒体で紹介していきたいと考えています。
- また、次年度以降は、トレーナー講座を受講される方の希望に応じた階層別研修を予定しています。トレーナー育成を通じて働きづらさを抱える人や、人手不足の農業からつなげる活動をより広範囲で行うことを本事業のゴールイメージとして設定しています。

第3 今後の取り組み

令和5年度～自走化の予定 農キャリアトレーナー階層別研修

	農キャリア 入門 (1.5時間)	農キャリア トレーナー 育成講座 (10時間)	農キャリア トレーナー 上級講座 (90時間)	OJT プログラム
マネージャー	×	●	●	40時間
トレーナー	×	●	×	20時間
サブトレーナー	●	×	×	-

※OJTプログラムは、NPO農スクールが提供している「就農支援プログラム」に実際に参加していただくとなります。
※「農キャリアトレーナー上級講座」は、農業者は免除となります。

農キャリア・マネージャー、プログラム提供者になるには
「農キャリアトレーナー上級講座」90時間、「農キャリアトレーナー育成講座」10時間
& 農スクール講座OJT40時間(導入編&基礎編)受講

農キャリア・メイトレーナーになるには
「農キャリアトレーナー育成講座」10時間& 農スクール講座OJT20時間(導入編)受講

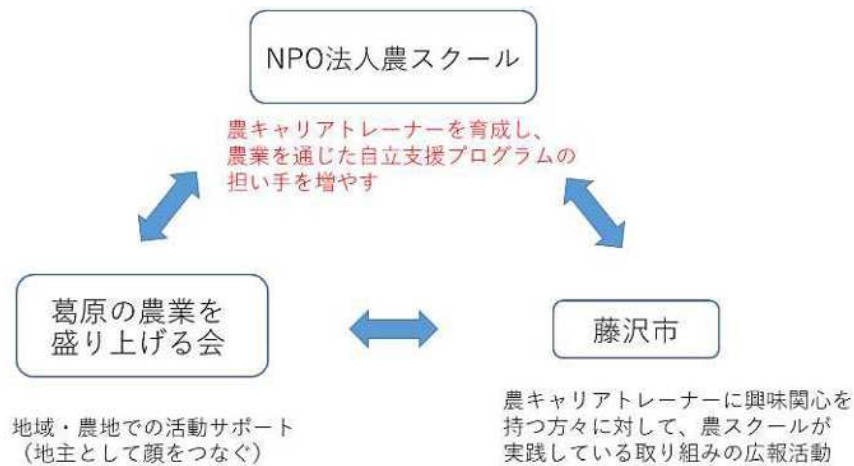
農キャリア・サブトレーナーになるには
「農キャリア入門講座」(1.5時間)を受講

16

- 階層別研修について、もう少し具体的に紹介しますと、階層ごとの役割と講座のボリュームを分けて、トレーナーになるための必要な学びを提供するという構想になっていまして、第一歩として手軽に受講できる入門講座から、より深い農業知識やプログラムの構築方法を学ぶ上級講座まで用意しています。
それによって就農支援プログラムにアシスタントとして参加する方やプログラム全体の責任者として参加する方といった、学びに応じて階層を決定しています。

第3 今後の取り組み

自走化後⇒藤沢農ネットワーク 構成団体と役割



17

- こちらのスライドは、自走化した後、藤沢市農ネットワークの協議会の役割と相互連携の流れ、今後の方針についてまとめたものとなります。
- 農スクールでは、農キャリアトレーナー、農業を通じたプログラムの担い手を育成し、現場の担い手を増やすことを今後も主眼に置いて活動してまいります。
そして、藤沢市地域共生社会推進室では、トレーナーを希望される方、現状に対して問題意識を持っている方に対する取組の広報活動を引き続き担う予定です。

第3 今後の取り組み

分散型の支援体制のイメージ



- 最後、分散型の支援体制のイメージとして掲載していますが、農キャリアトレーナーとなる人材を育成することによって、今後構築を目指す支援体制となっています。
- これまでは、農業を仕事にする雇用就農のサポートの話が中心になっていましたが、あくまでもトレーナー本人の考えごとに支援の目的や対象者が決まってしまうべきだと考えています。
- 例えば、社会的な孤立を防ぎたいという場合は、畑に集まって一緒に農作業を行うような居場所づくり事業というものが有効になると考えますし、農スクールのように、引きこもりの方だったり、働きづらさを抱えている方の経済的自立をサポートしたいということであれば、そういった農作業を通じたトレーニングと、その後の出口となる雇用支援サポートまで一貫して行うことが必要かと考えています。
- このように支援の担い手となるトレーナーが県内各地で活躍することで、当事者の方やその身の回りの方は、自身に適したプログラムがどこでこういった内容で開催されているのを見つけやすくなって、それに参加いただくことで、より広範囲への支援が可能になるという、今後の方針としては、そうした形で考えています。

7 (藤沢地域) プレゼン後の 質疑応答

- (1) トレーナーについて
- (2) 引きこもり支援について
- (3) 畑オープンデーについて
- (4) 自走化について
- (5) その他

7 (藤沢地域) プレゼン後の質疑応答

(1) トレーナーについて

Q1-1

何人必要と考えているか。

藤沢市内だけでなく全国で活躍するトレーナーを育成するのか。

A1-1

- ・量より質であり、実現可能性では5人前後を想定している。
- ・活躍エリアは、まずは藤沢市を中心に、神奈川県内と考えている。

Q1-2

トレーナーが活躍するための伴走支援、連携、情報提供等の仕組みは。

A1-2

- ・現状では、農スクール単体で研修を行っており、まだ仕組みにはなっていない。
- ・トレーナーの要請で、法律、制度、雇用等の関係の研修を補足してほしいという話ができてきているので、行政からの情報提供などは考えられる。

7（藤沢地域）プレゼン後の質疑応答

(2) 引きこもり支援について

Q2-1

藤沢市には何人の引きこもりがいるのか。

A2-1

- ・引きこもりの人数は、具体的な把握が困難だが、国の調査等を藤沢市の人口に当てはめると、4,000人弱である。

Q2-2

引きこもりと、どうつながるのか。

A2-2

- ・現状では、農スクールのホームページを見て直接問合せをいただくケースがほとんどであるが、県内の自治会やクリニック等で配布した冊子を通じてオープンデーに参加したケースも一部ある。
- ・市への引きこもりに関する相談からつないだ事例もあり、引きこもり支援としての農業という考え方は、着実に広がっていると実感している。
- ・将来的な方針としては、市と連携して、市のホームページに掲載するなど広報の弾を増やしていく。

7（藤沢地域）プレゼン後の質疑応答

(3) 畑オープンデーについて

Q3

延べ99人参加者とのことだが、重複はあるか。
当事者の周辺の方が中心で、なかなか当事者にはつながらないのか。

A3

- ・重複はある。3、4か月連続で参加した方もいれば、2回目につながらない方もいた。
- ・当事者には、つながりきらなかった。

7（藤沢地域）プレゼン後の質疑応答

（4）自走化について

Q4

これだけの時間数をかけた研修を行うためには、講師料等で支出が増えていくが、来年度から自走化するに当たり、収益化できるのか。例えば、藤沢市から助成金がでるのか。

A4

- ・NPO法人ゆえ寄付金を募って活動しているが、それだけでは限界が生じるため、別事業での助成金も活用した活動になっていくのが現実である。
- ・個々の助成については、市でも制度があるので、必要に応じて話し合いをしていきたい。

7（藤沢地域）プレゼン後の質疑応答

（5）その他

Q5-1

苦労した点を教えてほしい。

A5-1

- ・オープンデー、トレーナー入門講座などに参加いただいた方を次にどうつなげるかに苦労している。
- ・「良かった。」との声はいただけても、引き続き畑に来てみたい、本格的にトレーナーをやりたいと、その後何かにつながるケースは少数である。
- ・次の行動に「つなげる」のも、次の担い手になってもらう意味の「つなげる」も両方まだまだである。

7（藤沢地域）プレゼン後の質疑応答

（5） その他

Q5-2

県で別事業として実施している「農福連携マッチング等支援事業」との連携はあるのか。

A5-2

（事務局の県から回答）

- ・「農福連携マッチング等支援事業」は、障害者を重点に置き、農家と障害者をつなげるマッチングの事業であるため、引きこもりに対する直接的な支援である当該事業とは、支援の質が変わってくる。

別表

個別事業一覧

	分野	協議体名 (構成組織)	事業名	現状における課題認識
1	高齢者活躍の仕組みづくり支援	城島活力創造推進協議会 <構成組織> ● 城島地区地域活動推進会議 ● 平塚市 ● (特非) 湘南 NPO サポートセンター	地域資源活用による交流型体験の里づくり事業	<p>【背景】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・城島地区は平塚市北部の伊勢原市境界に位置する田園地域で、ほとんどの地域が市街化調整区域になっていることであって、急速な人口減少、少子高齢化が進行している。 ・そのため、スーパー、病院等の生活支援施設も極めて少なく、小学校児童が減少する一方で、農業従事者の高齢化による休耕や耕作放棄地が増加しており、地域運営の持続が危ぶまれている。 <p>【現状】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで、個別農家でのイチゴ農園やバラ農園、地元 JA の直販店等の取り組みが行われているが、地域全体の連携、活性化には結びついてはいない。 ・既存集落周辺は農用地区域が広がり、農地外への転用には農業委員会との協議、地域での合意形成が不十分となっている。また、空家・空地も増加傾向にあり、「空家等対策の推進に関する特別措置法」に基づき活用を模索している。 ・「地域活動推進会議」が主体となって対応策の検討に着手しているが、課題が正確に把握できず、その共有も十分ではなく、足踏み状態になっている。 <p>【認識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の農地や空家の利用、生活環境の維持・向上が課題であり、若年層や農外就業者の定年後の地域運営への参画の仕組みづくりが課題となっている。 ・そのため、令和 2 年度に実施した将来の居住・就業・土地利用意向等の把握のためのアンケート、地元高校生、大学生を交えたワークショップ等を踏まえ、交流人口を増やしていくための対策を検討する。 ・これらをもとに、農・食・学が連携した体験交流型活動の展開とその運営組織を立ち上げ、「身近に農がある暮らし・地域」の中で子育てしたいと思えるよう次世代が住み、働いていける環境・基盤を構築していく。

分野	協議体名 (構成組織)	事業名	現状における課題認識
高齢者活躍の仕組みづくり支援	<p>三浦市地域資源 情報プラットフォーム 推進協議会</p> <p><構成組織></p> <ul style="list-style-type: none"> ●三浦市区長会 ●三浦市 ●(特非)YMCA コミュニティサポート ●(社福)三浦市社会福祉協議会 	<p>Don't tell anyone!</p> <p>地域資源情報を集めて広めて繋がるう大作戦!</p>	<p>【背景】</p> <p>三浦市は三浦半島の最南端に位置し一次産業が中心の人口約 42,000 人の都市である。公共交通機関は市の北部のみ京急線の駅が届き、市内移動はバスに依存している。高速道路はなく、交通インフラの未整備からか、現在まで都市化が進まず、地域に伝承される郷土芸能などが数多く継承されている。人口減が続くが、人口を維持するための背景に大きな成果は上がっていない。高齢化率 40% を超えており、唯一の自慢できる数字は 90% 以上の自治体加入率である。NPO 法人は 23 団体で地域活動は自治会活動が担っている状況である。</p> <p>【現状】</p> <p>三浦市社会福祉協議会が、地域踏査やサロン事業を行い地域における高齢者コミュニティ観察・育成活動を行っている。地域活動では圧倒的に女性が中心で男性の参加率は少数である。また、企業に勤めていたリタイア組は地域とのかかわりが希薄で、交流経験がなく参加機会が乏しい。団塊世代が 70 代を迎え、このようなリタイア組が増加し、引きこもってしまいうと地域活動が停滞しコミュニティ全体へ影を落とすことになりかねない。</p> <p>さらに、高齢世代が直面している情報入手の課題がある。コロナウイルス関連の情報伝達を通じて露呈した。従来自治会の重要な情報伝達事項であった閲覧板がリスク回避で使えなくなった。広報誌や閲覧板のタイムラグの問題はあるものの重要な情報伝達手段である。今後、高度衛生配慮を理由に市民へ情報伝達がデジタルに置き換わることも想定される。</p> <p>【認識】</p> <p>令和元年 6 月に開業した三浦市民交流センターは「市民活動支援施設」、「地域資源情報の受発信」機能という 2 つのミッションを有している。高齢者が活躍する場を「地域資源情報の受発信」と結びつけることで、「社会参加することによる生きがいづくり」、「楽しみながらデジタルスキルが向上する機会」双方について、センターを中心に課題を解決するサイクルが動き出し、持続可能なスキームとして構築できると考えている。</p>

	分野	協議体名 (構成組織)	事業名	現状における課題認識
3	引きこもりへの支援	藤沢市農ネットワーク <構成組織> ● 藤沢市葛原の農業を盛り上げる会 ● 藤沢市 ● (特非) 農スクール	新しい支援様式 農園を引きこもりの活動場所！ 事業	<p>【背景】 自宅に半年以上閉じこもっている引きこもりの方が115万人（2018年）を超えるなど、全国的に数が増えている。そしてそれらは藤沢市も例外ではない（人口比で4,000人弱（藤沢市人口約44万人））。藤沢市は都市からも近く、農園も多い場所としてこれまで農業と福祉の連携（農福連携）等が行われてきた。農業の現場を引きこもりの支援にも生かす仕組みづくりが藤沢市に求められる。</p> <p>【現状】 様々な団体が引きこもりの支援を行っている。しかし、それらは基本的に屋内の施設を使い、そこに集まって行うという手法である。今回、新型コロナウイルスの感染拡大によって室内に不特定の人が集まるというリスクが顕在化したことにより、今までのやり方を見直す必要がある。</p> <p>また、農業を引きこもりの支援場所として考える際、居場所づくりを考えようと市民農園や近隣農家の農園の利用が考えられる。しかし、市民農園を管轄する部署や仕事としての農業を管轄する部署は居場所事業を担当としていない。それら農園を支援場所として生かす活動が考えられる。</p> <p>【認識】 引きこもりの支援を考えるとき、いくつかのステップに分けて考える必要がある。例えば引きこもりが働くことになることを目指すとすると、大きく3つのステップが考えられる。「1 外出し、体を動かし生活リズムを整える点」「2 集団行動（家族以外の人とのコミュニケーション）を行う点」「3 職場が求める生産性で働く点」である。</p> <p>支援活動は、現状、施設に通うことなどで生活リズムを整えたり、何かしらの集団行動を行ったりする1と2のステップへの支援が主である。しかし、ウイルスによってこれまでの支援活動を行うことが難しくなると、2のみならず1も行えなくなる。時間をかけて築いた集団行動への慣れや生活リズムが元に戻ってしまう危険がある。そこで家族で行える手法や、屋外で、しかも家の近くの活動場所を作ることが要請される。</p>